
テイルズオブヴァンジャンス

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブヴァンジャンス

【Nコード】

N6536R

【作者名】

ルナ

【あらすじ】

少女、ルナIIチェイサーは男たちに追われて駆けていた。軍服を身にまとった彼女は軍の裏切り者だった。

大事なものを失った復讐のために、ルナはただ生きる。

彼女の復讐は果たされるのか！？

裏切りの乙女は恨みと共に駆ける（前書き）

※この小説は、『腹黒デイスンダーの』の主人公を使った番外編物語です。

※テイルズキャラやオリキャラが出ます。

裏切りの乙女は恨みと共に駆ける

それは、一人の少女の決意から始まった。

「私は、絶対に父さんたちの敵を討つ!!」

「あんただけに苦労はさせないわ!!」

あたしだってあいつらを許せない!!」

「エツタだってパパとママの敵取るんだからあ!!」

「私だって!!」

この中では二番目に年上の少女が言うと、

一番年長の少女、一番年下と思しき少女、

そして、三番目に年上の少女が決意をのべた。

この物語は、幼い四姉妹たちの

強き想いから始まる――。

はあはあ、と息を切らせるような
声が響いている。

声の主は、陽光にきらめく金の髪
をポニーテールに結び、紅いリボンを
結びつけた少女だった。

紅色の軍人が着る様なかっちりとし
た雰囲気な服を身にまとい、

小さい革靴も赤、腕に付けられたリストバンドも赤、
不気味なほどに赤系統のものばかりだった。

その目さえも宝石のような紅い目である。

唯一違うのは、その髪と白い肌、

そして首にかけられた丸い金の飾りが

ついた、しっかりと首に止められた首飾りだった。

たとえ、血が散ったとしても気がつかない
かのような色だった。

少女の顔が可憐でなかったら、
殺人者のようにも映っただろう。

少女はちらりと後ろに目を向けると、
唇をかみながら眉をひそめた。

「待て！！ 裏切り者、ルナⅡチェイサー！！」

「もうっ、しゅっこい！！」

後ろにいるのは、武器を構えた男たちだった。

斧、剣、大剣、武器の違いはあれど、

彼らの目的はこの少女一人だった。

「追いつかれるぞ、相棒！！」

「そんなこと分かっている！！」

羽根の生えた動物のような生物が

少女の周囲を飛び回り、少女は

悲鳴のような声を上げるとスピードを速めた。

少女の名前は、ルナⅡチェイサー。

キムラスカ陸軍第一小隊所属、とゆたかな

胸にとめられた名札にそう記されている。

「モルモッ！！ 武器を寄せ、

こうなったら戦う！！」

「ええっ！？ この人数を相手にするの！？

無茶だよ、相棒！！」

「いいから寄せっ！！」

ルナが立ち止ったので、モルモと呼ばれた

生物はため息をつきつつ、棘のついたヨーヨー

と巨大な弓を荷物から出して彼女の方に落とした。

しっかりとキャッチし、ルナはキッと男たち

を睨みつけながらヨーヨー、《ユグドラシル》を構える。

「覚悟しろ、『殺戮天使』の名がだてではないと
いうことを分からせてやる」

モルモがかたく目を閉ざす。

血の匂いがある場にたちこめた――。

同時刻、平和でのどかな雰囲気のある『イセリア村』では、週三日の狩りの準備が進められていた。

リーダー各の少年が少年少女たちに指示を出していく。その中でももっとも張り切っているのは、ピンクの髪にリボンを結んだ少女だった。

「よーし！！ 張り切って倒しちゃうんだから！！」
「カノンノ、無茶はしないでね」

カノンノと呼ばれた少女はにっこりと笑いながら「大丈夫大丈夫」とはしゃぐ。

彼女のフルネームはカノンノ・イアハートという。明るく元気で働きものな村の少女である。

その彼女と仲がいい村の少年、ジーニアス・セイジは苦笑しながらその様子を見守っていた。

「ジーニアスは心配性だな。狩りをするだけだろ？
カノンノは強いんだから心配ねえって！！」

「そうだよ、もし、何かあったとしても、俺たちがしっかりと守るしな」

さらに、つんつんした茶髪の少年ロイド・アーヴィング、短い赤毛の少年ルーク・セシルがそう請け負った。

リーダー各の少年がため息交じりに言い放った。

「お前らは本当に呑気だな」

「ひどーい！！ ため息つくことないじゃない！！」
むうっ、と頬を膨らませるカノンノ。

だが、リーダーの少年はそれ以上何も言わず、依頼があると言ってそのまま村を出て行った。

「絶対に、見返してやるんだから！！」

拳を握るカノンノに、さらに心配そうな顔になったジーニアスは小さくため息をつくのだった――。

その頃、ルナは。

頬と腕を血で汚しながら歩いていった。

モルモが血の匂いで顔をしかめ、

ルナもまた血をぬぐいながら嫌な顔をしている。

それは、ルナの血ではなかった。

さっき戦ったものたちの血である。

殺戮天使、それは、ルナの異名だった。

軍部の依頼をすべてこなし、可憐な顔で表情を

一つも変えずに敵を打ちのめした彼女に、

軍部のものたちがつけたものである。

ルナは目的のためにと心を殺し、

いままで生きてきたのだった。

「……相棒」

「何だ、モルモ」

さすがに疲れたらしく、ルナの息は

かなり上がっていた。

聞き返され、モルモは迷うように

視線を泳がせる。

「あの、さ。ちょっと言いにくいことがあるんだけど……」

「早く言え」

「こんなに敵がたくさん出てくること、

変に思わなかった？」

「っ！？ まさか……」

ルナの表情が変わった。

モルモの顔から血の気が引き、

だがやっと口を開いた。

「その首飾り、発信器、だよ」

「それを早く言わんかこの馬鹿精霊!!」

「ひいっ、ご、ごめんよ、相棒!!」

ルナが眉を吊り上げて拳を振り上げると、モルモは小さい両手で必死に頭をガードした。

彼女はためいきをつき、拳を下ろして立ち止る。

「今更言っても仕方がないな。」

だが、発信器か……逃げ場はないな」

「相棒!!」

鋭い声がモルモから上がった。

ルナは彼をとっさに上空に投げ、

見事な動きでその場から飛びのいた。

今まで彼女がいた場所を、ナイフが貫いていく。

「止まりなさい!! 殺戮天使、ルナ!!」

ルナは舌を打つと、そのまま動きを止めた。

いつの間にか、かなりの人数が彼女を取り囲んでいる。

「教会警護隊、オラクル信託之盾が

私たちに何の用だ？」

「あなたは、何故、人を殺すのですか!!」

金の髪を長く垂らした娘が悲しげな声を上げた。

水色に近い髪を三つ編みにした娘がルナを睨んでいる。

「軍部の手先になり下がったか、教会の使者」

「違うわ!! 私たちは、軍部とは関係がない!!」

濃いピンクの髪に花の髪飾りを飾った少女が

怒鳴るような声を上げた。

憎々しげに彼女を睨む目は、今にも持っている

杖で殴りかかりそうな雰囲気だった。

「答えなさい、さもないと!」

「モルモ!!」

「相棒!!」

水色の髪の娘がモルモにナイフの切っ先を当てていた。

ルナはくっ、と笑みをこぼすと、彼女たちをあざ笑いながら

言葉を発した。

「軍属の者たちに、与するものに生きる価値などあるものか」
「何ですって!!」

髪飾りの少女が悲鳴のような声をあげる。

ぬいぐるみに乗った黒髪の少女の眉が跳ね上がる。

だが、次の叫びに全員は動けなくなった。

その目も、声にも、たった十五歳の少女とは思えない迫力が秘められていた。

「軍属の上部は闇の巣窟だ。それを支援するものたちに、腐ったものたちに、生きる価値などあるものか!!」

ルナはそのまま目を見開く少女の腕を鋭く蹴りあげると、モルモを救出して服の中に避難させた。

「待て!! 逃がさないってのよ!!」

黙っていた赤毛の二挺拳銃の少女がルナを威嚇しようと射撃しようとする。

しかし、それより先に背後から何者かが彼女の腹を撃ち抜いた。

「……ぐっ……!!」

「相棒!! しっかりしろよ、相棒!!」

膝をつくルナに、モルモが必死で呼びかけた。
水色の髪の少女が赤毛の少女を怒鳴りつける。

「イリアッ!! 誰が撃てと言ったの!!」

「ち、違う!! 今のはあたしが撃ったんじゃないってのよ!!」

彼女が叫んだのと同時に、ルナは煙幕弾を投げつけてその場から退却した。

血がだらだらと腹から流れている。

ルナは苦しげに息を吐きながら森を歩いていた。
ここがどこなのかなんてわからない。

分かっているのは、守護精霊であるモルモの力をもってしても、自分の並はずれた治癒力をもってしても、傷がふさがらないことだった。

今までにあった者たちの顔が現れてはしだいに消えていく。

「私、あなたと一緒に国を変えたいの!!」

「私もあなたを守りたい」

「お姉ちゃん!! 絶対に生きて帰ってきて!!」

「ごめん、俺が、しくじったり、したから!!」

姉さん、戻って来なきゃ嫌だぜ!!」

ピンクの髪を三つ編みと右で一つ結びにした、

双子のようにそっくりな少女たち、

血のつながらない自分を姉と呼んでくれた、

義兄弟のさかずきをかわした黒髪と金の髪
の少年、そしてー。

「ママの敵、取るんだからあ!!」

「あたしもあいつらを許せない!!」

「私だって!!」

ピンクの髪を長く伸ばした妹、

ピンクの髪をポニーテールに結った姉、

そして二番目の妹ー。

「許せ……よ……同士、たち……」

ルナは覚悟を決め、樹の幹に寄りかかって

腰を下ろした。流れ続ける血で手を汚しながら、
紅き目を閉じる。

モルモの絶叫が上がった。

「嫌だ!! 嫌だよ、相棒、ルナッ!!」

おいらを置いていかないで!!」

まだ逝くなっ、ルナあああっ!!」

「……んう!？」

と、パチッとルナの目が再び

開いたので、モルモは驚いて飛び上がった。

ルナは茫然としたように腹に手を当てたりしていたが、くつと笑うと話しだした。

「私はまだここで死ぬわけではないようだ。

神は、私の味方をしているらしい」

「あい……ぼう……？」

「傷は、徐々にだが癒えていっている。

あの月を見たまえ、今日は、わずかだが

私の力の源はあるようだ」

モルモは慌てたように月を仰いだ。

新月だとばかり思っていたけれど、

細いながらも月が見えていた。

「今日一日を耐え抜けば、私の傷は癒える、な。

モルモ、お前は私をここで守り抜け。

何かあったら知らせろ。いいな？」

「相棒、大丈夫か!？」

「大丈夫、だ。少し疲れた、眠る。

安心しろ、死んだりなんかしない」

ルナはまるで死んだかのように

動かなくなった。息をしていることから、

死んではないと分かる。

モルモは周囲を飛び回りながら

警戒していたが、がさがさと草を

かき分ける音が響き、モルモは恐怖と

心配のあまり絶叫した。

「お、おい、こっちに来るなッ!!」

ルナに何かしたら承知しないからなッ!!」

「きゃああっ、人!? しかも怪我してる!!」

向こう側からやってきた少女は、

淡いピンクの髪をしていたー。

ルナは目を開けた時、どこだかわからない場所にいた。朝になっているらしく、日の光が起きぬけの目には眩しい。

さらりとピンクの髪が頬にかかったため、

まだ寝ぼけていた彼女は今まさに見ていたものの名前を呟いた。

「……エッタ……？」

「えっ!？」

髪に触れた時、驚きの声が上がってルナは目覚めた。

あたりを見回し、きょとんとしたような紅い目で少女を見る。

「カノン……ノ？ パスカ？ グラスバレー？」

違う……君は……」

カノンノは少し驚いたような顔をしていたけれど、やがてにつこりと笑うとあいさつした。

「よかった、目が覚めて。」

私はカノンノ。カノンノIIイアハートだよ。

ここはイセリア村。あなた、ここの

狩り場で倒れていたのよ」

「いあ……はーと……？」

「相棒!! やっと目が覚めたんだな!!」

ルナの目がカッと見開かれた。

完全に覚醒したようだ。

「モルモッ!! 貴様、何と言うことをしてくれた!!」

ルナはすぐそばを飛んでいたモルモをひっつかむなり、そのまま床に叩きつけた。

悲鳴が上がリ、カノンノが驚いたような顔で止めようとする。

それをすっぱりと切り捨てた彼女はモルモの首を絞めた。

「ど、どうしたの、あなた、いきなり!!」

「あなたには関係がない!! モルモ、貴様は知っていただろう!! 発信器のことを!! 私が生の人間に狙われていることも!!」

「あい……ぼう……ごめん……!!」　でも、相棒は目が覚めなかったし!!

オイラ、心配だったんだよ、ルナが!!」

「やめてええええええっ!!」

しだいに苦しげになっていくモルモに、叫び声をあげた

カノンノがルナを突き飛ばすようにした。

ルナはよろめき、そのまま床に手について転ぶのをふせぐ。

火の様な怒りが込められた目が彼女を射ぬいた。

「私が、あなたをここまで運んだの!!」

この子を怒らないで!!」

「あなたには関係ないと言っただろう!!」

これは、私とこいつの間の話しだ!!」

「関係はあるもの!!　私が運んだんだから!!」

ルナは舌打ちしながら立ち上がった。

真正面から潤み始めた淡い緑の瞳を受け止め、

同じ顔をしたメンバーの目とかぶり、ため息をつく。

「ここはもうすぐ軍の者に狙われる!!」

服を返せ、今すぐ私はここを出ていく!!」

ルナはさらに包帯の巻かれただけの体を

見るなり、そのままズカズカと部屋を出て歩き出し始めた。

カノンノとモルモが真っ赤になりながら彼女を止めようとする。

「待って!!　そのまま言っちゃ駄目だよ!!」

「相棒、もっと恥じらいを持って!!」

慌ててカノンノがかわきかけの衣装を投げたので、

ルナは素早く紅い軍服と革靴、リストバンドをつけ、

髪をポニーテールに結いあげた。

悲鳴が聞こえたのは、そのすぐ後だった。

カノンノの顔色が変わる。

「今の声……、コレットとソフィ!?!」

「遅かったか……」

ルナの脳裏に燃え盛る村がよみがえった。
平和な村が崩落した瞬間、大事なものたちを
失った瞬間が――。

村の広場に、金髪を長く伸ばしたかわいらしい娘と、
紫色の髪に大剣を持った、香水の匂いだろうか
きつい匂いを撒き散らした男がいた。

さらに、不安そうに淡い桃色の目を
潤ませた、つやのある黒髪をポニーテールに
結えた少女もいた。

「くそっ!!! ソフィを離せ!!!」

「コレット!!!」

茶髪に青い瞳の少年アスベルⅡラントと、
ロイドが悲鳴のような声をあげていた。

金の髪の娘は、白い服を着た金の髪に青い瞳の
少女コレットⅡブルーネルを、紫の髪の男は
紫の髪をツインテールに結った少女ソフィⅡバーンズを、
それぞれ拘束するように立っていた。

赤に近いピンクの髪を二つ結びにした

少女、ソフィの血のつながらない姉の
シェリアⅡバーンズも不安そうな顔をしている。

「ソフィ……」

「ねえ、デクス、本当にこんなところに
ルナちゃんはいるの? アリスちゃん疲れちゃった」

「でも発信器はここを指してるよ、アリスちゃん」

「デクスうざーい、ねえモモ? 村の人達に聞いてみてよ」

「はい、アリス姉様……」

と、アリスと言う名らしい娘と、デクスという名らしい
男が会話を始めていた。アリスがデクスの言葉をすっぱりと
切ってモモという少女に目を移す。

モモはびくつ、としたように身をすくめたけれど、やがて口を開いて張りのある声を上げた。

「ここに、ルナⅡチェイサーって人、いるですか？

モモと、デクス兄様と、アリス姉様、探してる、です!!」
たどたどしい言葉が村の人間たちに届く。

ロイドたちは迷うように立ち尽くしていた。

ルナⅡチェイサー。それは、カノンノが拾ってきた人物の名前だった。血まみれだったことから、

何かの事情があるのではないかということだった。

だが、この少女たちには不穏な空気が感じられる。そのまま引き渡すことはためらわれた。

「早くなさい。ここにいることは分かっているのよ。

さもないと、この子が痛い目にあうわよ？

アリスちゃん、こういう子の腕をへし折るの、大好きなの？」

「……っ!!」

「コレットおおおおおっ!!」

アリスの腕にかなりの力が籠った。

コレットがその痛みに声にならない叫びを上げ、

ロイドが悲鳴のような声を再び上げる。

「そうだそうだ!! アリスちゃんの言うことを聞け!!」

「きゃあっ!!」

「ソフィ!!」

デクスもソフィを掴む腕に力を込めた。

彼女とシェリアが悲鳴を上げる。

モモはただ悲しげな顔をするだけで、何も言わなかった。

とー。

「とことん腐っているな、軍属の者は」

「えっ、きゃあっ!!」

「うわあああっ!!」

ひゅんっ、と風を切るような音が響き渡った。

飛んできたヨーヨーが、アリスとデクスの両腕に直撃する。

コレットとソフィを拘束する手が離され、慌ててロイドとアスベルがそれぞれの大事な人をしっかりと胸に抱きしめた。

現れたのは、ルナⅡチェイサーその人と、カノンノとモルモだった。

「やっと見つけたわよ、裏切り者の、ルナちゃん？」

「アリスちゃんになんてことをするんだ！！」

アリスちゃんをいじめるやつはこのデクスがゆるさ「邪魔です」ぐふえっ！！」

アリスの表情が楽しげなものになった。

手にした鞭をぺちぺちと片手に打ち付けている。

デクスはルナがアリスに攻撃していたことを

怒っていたが、キツとなったモモによって吹き飛ばされた。

「デクス！！　ちよっとモモ、何をしているの！？」

「ルナ姉様、私はあなたを、あなたの裏切りを

絶対に許さない！！」

「何を勘違いしているか知らないが、私は裏切ってなどいない。

私は、元々、反乱軍—『ディセンダー』のリーダーだ！！」

いきなり強気になったモモが籠手をした拳で襲い掛かる、

ルナはヨーヨーを持ち直すと、彼女の攻撃を受け止めるために身構えるのだったー。

裏切りの乙女は恨みと共に駆ける（後書き）

また連載を始めてしまいました。
復讐をテーマにしたストーリー、
テイルズオブヴァンジャンスです。
次回も見てください。

仲間との再会と裏切りの乙女の涙

前回のあらすじ（語りルナ）

私はルナⅡチェイサー。

キムラスカ軍所属、ではなく、
軍にスパイとして加入していた、

反乱軍『ディセNDER』のリーダーだ。

私は今、イセリアと言う名の村にいる。

カノンノという少女が倒れていた私を
連れてきたようなのだ。

私のペンダントには発信器が仕込まれていた。

そのデータを使って、キムラスカとマルクト軍の
者達が私を狙ってやってきた。

私は、以前仲良くしていたモモと戦うことになったのだがー。

ルナⅡチェイサーは、身軽な動きで、如月桃キサラギモモの拳での攻撃を

かわしたり強化されたヨーヨーで受け止めたりしていた。

はらはらと村人たちがそれを見守っている。

そして、ルナの相棒であるモルモもー。

「相棒、頑張れ！！ 負けるなっ！！」

「許さない許さない許さないっ！！」

淡い桃色の瞳に涙を浮かべながら突っ込んでくるモモ、

少々押され気味なルナに、二人の少女が立ち上がった。

「『ホーリーソング！！』」

金の髪に白い服の少女コレットⅡブルーネルと、

茶の髪を長く伸ばした黒い服の少女ティアⅡグランツである。

彼女たちの援護で、ルナのスピードが上がった。

「コレット、でかした！！」

「やるな、ティア!!」

それぞれの思い人、つんつんした茶髪の
ロイドⅡアーヴィングと、短い赤毛のルークⅡセシルが
声をあげて彼女たちをほめる。

彼女たちは顔を赤らめたが、それと同時に

金髪の一見人形のようにも見える娘がギリツと
歯ぎしりをしつつ手にした鞭を握りしめていた。

「きゃあっ!!」

ルナのヨーヨーがモモの頬をかすめて吹っ飛ばす。

目が覚めかけたデクスの腹に直撃し、つぶれたゲコゲコの
ような声上がる。だが、気絶はもうしなかった。

「痛い、です……」

ふええっ、と状態が戻って泣きだすモモに、

ルナはほっとしたような顔になった。

彼女は一見まだ余裕があるような顔をしていたけれど、
実際にはかなり疲れていた。

傷もまだ完全にふさがっている訳ではない。

「何やってるの、モモッ!! 行きなさい、デクスッ!!」

苛立ったアリスが命じたため、デクスが二人の間に
飛び込み、勝負の好機は敵側に近づいた。

「ひうっ!!」

いきなり弱弱しい声をあげると、ルナはその場に
うずくまってしまったのだ。

「ど、どうしたの？」

ピンクの髪にリボンを結んだ少女カノンノⅡイアハートが、
不審そうに、飛んでいる生物モルモを見つめた。

モルモはすぐにルナが苦しんでいる理由が分かり、
心配そうにその目を潤ませる。

「匂いだ……」

「匂い？」

銀の髪 of 少年ジーニアスⅡセイジが眉をひそめる。

モルモは憤ったように叫んだ。

「ルナはあいつの香水、メロメロ香の匂いが駄目なんだよ!!」

並はずれて五感が鋭敏なルナ。しかし、強い匂いや大きな

音は彼女にとって大敵なのだった。

くすつ、とあくまでかわいらしくアリスは微笑む。

ルナは紅い目に涙を浮かべながら睨みつけた。

「どこまでも、姑息な手を……!!」

「あら、勝てればいいのよ?」

「そうだそうだアリスちゃんを悪くいうと

このデクスが「デクス、きもうざーい」アリスちゃああん!!」

くすくすと笑うアリスに、デクスがルナに剣を向けたまま

賛同しようとする。しかし、アリスが突然表情を変えると

すっぱりと言葉を叩き斬ったため、デクスの絶叫が上がった。

アリスも参戦し、持っていた鞭でルナの体を強^{したた}かに

打ちすえた。ルナは歯を食いしばって痛みに耐える。

決して声などあげるものかとアリスを睨みつけていた。

その様子を楽しげに見ていた彼女は、ルナを突き飛ばすようにすると

その足を彼女の手の上に乗せた。

否、踏みつけたのだ。骨のきしむ音が響き渡った。

「あああああああっ!!」

ついにルナが声を上げた。さらに、アリスの表情が楽しげになっ
ていく。

それに呼応するように、デクスも彼女に攻撃をし始めた。

何もしていないのは、淡い桃色の瞳を潤ませたモモだけだ。

とー。

「旋桜花!!」

「ぎゃあっ!!」

「っ!」

カノンノがいつの間にかルナの前に飛び出していた。

愛用の大剣、セブンスサマーをしつかりと構えている。

結えられたリボンが風になびく様がり凜々しい。

ルナは驚きのあまり紅い目を見開いていた。

彼女の攻撃を皮切りに、コレット、ティア、ロイドが動いた。

「ブランデイス!!」

「きゃああっ!!」

「アリスちゃん!!」

「お前の相手は俺だ!! 魔神剣!!」

「うわあっ!!」

「これでもくらいなさい、ノクターナルライト!!」

「きゃっ!!」

コレットが構えたチャクラムをアリスに投げつけた。

悲鳴が聞こえた方向に行こうとしたデクスに、ロイドが

双剣で斬りかかる。さらに、ティアが再びアリスに攻撃した。

「今助けるわ!! ピクシーサークル!!」

「私も……ファーストエイド!!」

二つ結びにした赤毛の少女シェリアバーンズがルナの傷を癒した。

血のつながらない妹である、紫の髪をツインテールにしたソフィも
続けて回復の術をかける。

茶髪に青い目のアスベル・ラントも彼女に加勢した。

ルナは目を見開いたまま動かない。

しかし、アリスたちの表情が変わったので

顔色を変えて叫んだ。

「余計なことをするなっ!! 私一人で戦える、

一般人は下がっている!!」

「何を言っているんだ!! 今にも負けそうだった

じゃないか!!」

「軍人を、なめるな」

アスベルはルナの忠告を無視した。

他にも、茶髪の大きな武器を持った幼い少年カロル・カペル、銀の髪をしたジーニアスの姉リフィル、そして村にあるものを武器に見立てた村人たちがルナに加勢し始めたのだった。

ルナは唇をかみしめて立ち上がる。

脳裏に焼き付いていたのは、抵抗する村人と舞い踊る炎、

軍人に焼き尽くされたアイリリーの村の光景だった。

「いい加減に、しなさいよっ!!」

『うわあああああっ!!』

アリスの術が発動して村人たちをなぎ倒した。

家に突っ込んで壁が壊れたところもある。

「やめろ、関係のない者たちを傷つけるな!!」

「随分お優しいのね、殺戮天使の、

ル・ナ・ちゃ・ん？」

楽しげに言いながら鞭を奮うアリス。

と、それがすっぱりと両断された。

ルナがヨーヨーを振りまわして断ち切ったのである。

手に残った持ち手の部分を握ったままアリスは青ざめた。

「う、嘘……」

戦意を喪失したアリスの腹に拳を叩きつけると、

ルナはへたりこんでいるモモにも同じことをして気絶させた。

殺戮天使の本領を発揮してルナは駆ける。

だが、それよりも早くデクスが武器をカノンノに向けていた。

「よくもやってくれたな!! お前ら全員皆殺しだ!!」

「きゃっ!!」

「カノンノ!!」

(くっ!! まにあわない!!)

ルナは一旦足を止めてヨーヨーを投げつけようとしたが、

それよりもデクスの動きの方が早い。

関係ない人を巻き込みたくはなかったルナが舌打ちした時、

ジーニアスがカノンノの前に飛び出していた。

彼女を突き飛ばして攻撃の範囲内に入ったのだ。

「いやだ、ジーニアスうううっ!!」

カノンノが泣き叫ぶ。その顔が妹のそれと重なってルナはくらりとなった。泣き叫ぶ妹の顔が浮かんでくる。

しかし、そんなことをしている場合ではなかった。

森から飛び出してきた、軍人と思しき黄色がかった茶髪を三つ編みにした少女が村人を攻撃しようとしていたのだ。

その頃には、村人は全員薙ぎ払われたり

傷つけられたりして、まったく動きが取れなくなっていた。

悔しげな顔をしてへたりこんでいる。

ティアに攻撃しようとした少女に、ルナは素早く接近した。

「殺劇舞、桜花爆碎陣!!」
さつげきまい おうかばくさいじん

「えっ、きゃああああああっ!!」

ナイフの連劇が少女アリアⅡカノンに振るわれる。

桜を舞い散るかのような、ナイフの連舞はルナが本当に怒った時にしか見せない技だった。

口元に浮かぶは、暗い笑み。

ルナはたとえ同じ年くらいの少女であろうとも、

軍人を殺すことに何のためらいもなかった。

血が噴き出し、悲鳴があがっても手を止めない。

それが止まったのは、カノンノたちの方に目が行ったからだだった。手を止めたのはルナだけではない。

アリアも、デクスもカノンノも動きを止めていた。

ジーニアスの体がいきなり輝きだしたのだ。

その能力は――。

「まさか、何故村にいる彼がこの能力を!？」

眩しさに目を細めながらも大剣で攻撃しようとしたデクス。

しかし、ジーニアスが無詠唱で放った

サイクロンによって吹き飛んでいた。

「ええっ!？」 ジーニアスが無詠唱で魔術を!？」

「?スキルキラー?能力。軍にもそうそういない貴種な力、この目で見られるとな」

「?スキルキラー?能力って何、ルナ!?!」

カノンノが目を見開きながらルナを見つめた。

ルナは楽しい笑みを浮かべたまま説明する。

「全ての魔術を無詠唱で使える能力なのだよ。」

私はこの目で見るのは初めてだ」

「すごい……」

ジーニアスとデクスの戦いをカノンノはかたずを飲んで見守っていた。ルナはナイフを構えてアリアと再び対峙する。

アイテムを使ったのだろう、彼女の傷はいつの間にかふさがっていた。

「中々やるじゃない」

「そちらもな」

「どけ!! 俺はアリスちゃんを傷つけたその女を殺すんだ!!」

「そんなことさせるもんか!!」

再びジーニアスが能力を発動させた。

今度は強大な魔術でデクスを後退させる。

「メテオスオーム!!」

「ぐあああああああっ!!」

巨大な隕石が降り注いで

デクスを直撃して気絶させた。

戦いが終わると、何故かジーニアスの

まどっていた光は消えていた。

どうしてこんなことができたのだろう、と

ジーニアスは自分の手を見つめて考え込んでいる。

とー。

「よくも、デクス兄様を!!」

「しまった!!」

いつの間にかモモが目覚めていた。

拳を振るわれ、慌ててジーニアスがよける。

彼が今までいた場所の地面が割れた。

くらえばひとたまりもない。

「仕方ない」

ルナはしまっておいたナイフを投げてモモに

攻撃しようとしたが、アリアがその前に立ちふさがって

妨害した。舌打ちしても彼女はどかない。

「くっ……貴様……!!」

と、その時だった。

森の方角から、突如二枚のカードが飛んできたのである。

カードがアリアの鳩尾とモモの鳩尾に直撃して彼女たちは倒れ込んだ。

ルナが後ろを振り返るものの、そこにはすでにだれもいはいなかった。

「一体、誰が……」

シェリアに介抱されているジーニアスを横目で見た後、

ルナは暗い笑みを浮かべると、ナイフを構えて倒れた四人に近づいた。

モルモが目を閉じ、カノンノがきょとんとしたような顔になる。

彼女はそれには構わず、アリスの胸にナイフをつきたてようとした。

ルナにとって、軍人は村の、大事な人達の仇。

そんなやつらに同情する気持ちなど、欠片もありはしない。

「な、何をするの!？」

「殺す」

カノンノがギョツとなって叫ぶ。

それに対して、ルナの言葉は簡潔だった。

冷たい目が気絶したアリスを射抜く。

村人はまだたった十五にしかならない少女が、
ためらいもなく人を殺そうとしているのに驚きを

隠せないようだった。

と、ドンッとカノンノがルナにぶつかった。

ルナは手元がそれ、振り下ろされたナイフがアリスの腕を傷つける。目が見開かれる寸前、カノンノは四人の前に立って手を大きく広げた。

「駄目！！ 人を殺すのなんて、駄目だよ！！」

「邪魔をするなッ！！ お前も殺すぞ！！」

「カノンノッ！！」

睨みつける冷たい目は、それが本気であることを示していた。殺気を叩きつけられたカノンノの体が小さく震える。ジーニアスが驚いて声を上げた。

「どうして、この人たちを殺すの！？」

「決まっている、軍の奴らなど根絶やしだ！！」

あいつらがいなければ、苦しむ人間はいなかった！！」

ルナがナイフを動かしてカノンノの首筋にあてがった。

村人の悲鳴が上がり、カノンノもまた声にならない叫びをあげる。

しかし、そこを動かそうとはしなかった。

「殺されたいのか、早くそこをどけっ！！」

「嫌っ！！ 殺されたってどかないっ！！」

「何……？」

脅せばどくとばかり思い込んでいたルナは一瞬だけ

首からナイフを離れたが、すぐにまた突きつけた。

カノンノは淡い緑の目でルナをキッと睨む。

「無抵抗の相手を殺すんだね。それじゃあ、

あなただって軍人と同じじゃない！！」

「何だと！？」

シェリアの悲鳴が上がった。

ルナが振るったナイフが、とっさに身を引いたカノンノの白い頬を傷つけたのだ。ポタポタと血の雫が垂れ落ちる。

それでも、カノンノは逃げなかった。

「もう一度、言ってみろ!!!」

ルナの顔が怒りで真っ赤に染まっていた。
目には狂気が見え隠れする。

村人たちはもう気が気ではなかった。

「何度でも言うわっ!!! この人達を殺すなら、
あなたはあなたが憎んでいる軍人と同じよ!!!」
「貴様!!!」

「……この人達を殺すなら、邪魔する私を
殺せばいい。あなたにはできるんでしょう?」

「カノンノ、やめてっ!!!」

ソフィが悲鳴のような声を上げる。

ルナの手が震えた。彼女の目が、知り合いの少女の目と
重なる。人を殺すなど進言してきた、彼女と同じ
目と髪を持った少女と――。

「お前に、何が分かると? 私の恨みも、何も
知らないくせに」

「そんなの分からない!!! だけど、あなたが
間違っていることだけは分かるよ!!!」

ルナはため息をつく、ナイフを降ろした。

モルモに目を向け、もう一度ため息をつく。

「少し、頭を冷やした方がよさそうだな、私は」
「ルナ……」

モルモは息を吐いてルナの肩に止まった。

カノンノをルナが殺してしまうのではないかと
ずっとはらはらしていたのだ。

「武器を預かってくれ、モルモ。」

代わりに、エターナルカードを出せ」

「エターナルカード!? じゃあ殺さないんだね、よかった!!!」

モルモがルナの三通りの武器を受け取ってはしゃいだような

声を上げた。ルナは舌打ちをしながら足で地面を叩く。

そして、今更ながらにへたりこむカノンノの頬に手をあてた。悲しげな目が彼女を見つめる。

「すまなかったな」

「えっ？」

頬の傷のことを言っているのだと、カノンノはすぐには分からなかった。怪我をしたとはいっても、少し切っただけで血は出ているものの、そんなに大したものではない。

カノンノはこの少女のことをもっと知りたいと思った。悪い子ではない。ちゃんと、優しい心も持っているのだ。

「そのあなた。シェリアと言ったかね？」

「えっ？ あ、は、はい！！」

「カノンノと、そこで寝ている四人の回復を頼めるか？ 転送するのはその後だな」

「分かったわ。フェアリースークル！！」

ぱああっと光の環が出現すると、

カノンノの傷と、四人の傷は消えていた。

ルナは唇を噛みながら四人の前に

モルモから受け取ったカードをかざす。

「転送、連合軍基地」

フツと四人の姿が消えた。

ルナは息を吐いて座り込むと、その場で気を失った。

ルナが倒れて騒ぎだす彼らに、モルモは疲れていただけだと告げて彼女を誰かの家のベッドに寝かすようにと頼んだ。

カノンノが了承し、思ったよりも軽い彼女を抱き上げて家に向かおうとする。

と、そこに何人かの村人が帰ってきた。

「何の騒ぎだ？」

村のリーダー各、ユーリローウェル、

村長であり、ロイドの父のクラトスⅡアウリオン、
ルークの保護者であるガイⅡセル、

ティアの兄であるヴァンⅡグランツだった。

クラトスにアスベルが説明していると、

彼の目がカノンノに抱きあげられたルナに止まった。

「殺戮天使、ルナⅡチェイサーか」

「さつりく、てんし……？」

「「ルナちゃん（リーダー）！！」」

クラトスがそう言ったその時、

黒豹に似た青年と、肩までの金髪の少年が
飛び出してきたー。

ルナは目を覚ました時、一瞬どこにいるのか
思いだせなかった。

ベッドの横にはカノンノがいて、にっこりと
笑顔を浮かべてルナを見つめていた。

瞬時に状況と場所を思い出す。

「よかった、目が覚めたんだね。

ユージンさん、ミトス、ルナが起きたよ！！」

「ああ。世話をかけたな」

「よかった、心配したんだよ、リーダー！！」

「ユージン……ミトス……？」

無事で、よかった……」

「皆無事だよ、リーダー！！」

あなたが囧になってくれたから」

スパイ行動がバレ、仲間に撤退の指示を出した後、
ルナは一度も仲間と会っていなかった。

紅い瞳からとめどなく涙がこぼれる。

ルナは、ようやく心からの笑顔を浮かべていた。

「そんな顔もできるんだ……」

カノンノが呟いた言葉は、ルナには聞こえていなかった――。

目覚めたルナは、ミトスたちと一緒に村の広場にやってきた。皆が嬉しそうに声をかけてくる。

そのことが、ルナには理解できなかった。

何故、仲間でもない自分を心配していたのだろう、と。

あいさつを終えると、ルナはモルモからナイフを受け取って首飾りの鎖を切ろうとやっきになっていた。

「この、切れない……堅い……」

「話を聞いてもいいか？」

「作業をしながらでもいいのならな。」

元キムラスカ空軍第三小隊所属、クラトスⅡアウリオン殿？」

「っ！？ 私の軍属の時の所属を！？」

「私は十年間軍で働いていた。」

スパイ行動をしていたのは四年間だがな。

軍属の情報はほぼ頭に入っている」

ルナは驚くクラトスにちらとも目をやらず、かちやかちやと鎖にナイフを叩きつけていた。

「よくばれなかったものだな、今まで」

「ばれてはいたさ。こんなものをつけられていたのだからな。」

私は、実のところただ飼われていただけのようだ」

ピシッとようやく少しだけ鎖にひびが入った。

ルナは再び叩きながら話を続ける。

「私は人質を逃がすために仲間と作戦を取っていたが、それがバレて軍属の者に狙われることになった。

私の発信器のログを追ってきたのが、あいつらという訳だよ」

「発信器ねえ。そりゃあぶっそうだな」

いきなりユーリが話に割り込んだ。

ルナは顔を上げずにそのまま口を開く。

「だから壊しているんだろう。……で、話の続きだが、
あなたも名前くらいは聞いたことがあるのでは？」

連合軍『ヴァンガード』所属、通称？サドのアリス？、
通称？3Kデクス？。後は、キムラスカの
アリアⅡカノンとキサラギモモだ」

「連合軍、か……」

クラトスが呟いた時、ようやくパキンツと鎖が割れた。
ルナはくつと楽しげに笑うと、それを握りつぶして破壊する。
パラパラと散る破片を、面白そうにユーリが見つめていた。
クラトスの気持치가ルナには分かっていた。

クラトスは戦争の際に愛する妻アンナを失っている。

連合軍は、キムラスカとマルクトの戦争の後にできたものだ。

複雑な想いを抱くのは当然だろう。

戦争さえなければ、失わずにすんだのだから。

同じような顔になっているのは、ガイとヴァンだった。

ガイは姉のマリィベルを、ヴァンは父と母を戦争で亡くしたのだ。

彼らはそれぞれ、元マルクト空軍第五小隊四連隊所属

であることをルナは知っていた。

死に物狂いで血のにじむような努力で掴んだ情報だ。

ばれた者を殺したことだって、殺されそうになって

殺したことだってある。

「ルナ！！ シェリアが呼んでるよ！！」

「分かった、モルモ。話は済んだだろう？」

私はこれで失礼する」

ルナは感觸の消えた首に手をやって息を吐くと、
ポニーテールを揺らしながら歩き出した。

彼女のもとに行くと、ミトスとユージーンがまるで
長年そこにいたかのように溶け込んでいた。

ルナは肩をすくめてそれを見る。

「何故君たちはあつという間に村の人間に

なっているのだね？」

「村の人間になんてなってないよ!!」

むしろ、ルナが村に溶け込んでないだけでしょっ!!」

「うるさいのだよ」

ぎゃあぎゃあと言い合うルナとミトスを、ユージーンがほほえましそうに見ていた。

その様子を嫉妬交じりの瞳で見っていたことを、二人は全く知らない。

「朝ごはんを食べない？ 今日のカニタマをたくさん作ったのよ!!」

「カニタマはすごくおいしいんだよ、ルナ!!」

一緒に食べよう!!」

「いや、私は……」

「食べないの？」

「ううっ（純粋な目が痛い……）」

シェリアがカニタマを作ったので朝ごはんにしないかと声をかけてきた。ルナはそこまで世話になるのは悪いと断ろうとしたが、ソフィの目があまりにきらきらしているので断り損ねた。

ミトスたちがカニタマを食べているのも、

この姉妹の誘いを断り切れなかったからだろう。

ルナはカニタマを盛った皿を受け取って

一口食べた。ホッとするような味が口に広がる。

「おいしい……」

「そうでしょう!？ やっぱカニタマは最強!!」

「もう、ソフィ、食べてるときは席を立たないの!!」

「いいじゃないか、シェリア。堅い事言うなよ」

「アスベルがそうやってソフィを甘やかすから!!」

「シェリア、おかわり!!」

「はいはい、ちょっと待ってね!! くら、コレット、

ピーマンを残しちゃ駄目よ!! ジーニアスも、
にんじんを隠したって分かるわよ!!」

ロイドにお代わりを盛ってやるシェリア。

その際に、嫌いなものを残そうとしたコレットと
ジーニアスを叱っていた。

あまりに和やかな雰囲気、食べ終えたルナは
皿を返すとその場から姿を消した。

モルモが慌てて追っていく。

その様子を見ていたユージーンがぽつりと言った。

「辛いようだな、この光景を見るのは。」

失くした過去を思い出すんだろう」

「うん……。いつかこういう場所で

一緒に笑えたらいいのにね」

ミトスも悲しげにつぶやく。

彼も楽しい過去を失った一人だったー。

ルナはモルモと歩きながら過去を思い出していた。

失った楽しい過去、愛しい父と母。

それを違った形で見せつけられるのは、

ルナには泣きたいくらい辛いことだった。

「あれ……?」

と、ルナは森の中で女性が一人いるのを発見した。

村の人だろうか、と一瞬思ったが、カードを

拾い集めているのを見て違うだろうと思う。

その人は癖のある黒髪と黒い瞳を持っていた。

「助けてくれたのは、あなただったのだな」

「私はヒルダ。ただの旅人よ」

ルナはただの旅人だという女性の素性が気になったが、
あえて聞かずに彼女を見送った。

「モルモ、頼みを聞いてもらってもいいか?

エターナルカードで反乱軍本部に飛べ。

そして、仲間を呼んできてほしい」

「仲間を？ どうして？」

「私はずっとここにいる訳にもいかない。

それに、この村でログが止まっているのだから、
村が狙われる可能性は高い。だからだ」

「分かったよ、相棒！！」

モルモはカードを出すとその場から消えたー！。

おまけ短編

『反乱軍の本部』

モルモが本部に飛び込むと、真っ先に
動いたのは黒髪の優しげな女性だった。

「モルモ、無事だったのね。」

「いうことは、ルナも無事ね」

「うん！！ その通りだよ！！」

ジュデイスも無事みたいでよかった！！

あ、スパード、君も無事なんだね！！」

モルモはまずは再開と無事を喜んだ。

そして、隣にいた少年に目を向ける。

彼は鮮やかな緑の髪を持っていた。

名前をスパードⅡベルフォルマという。

「何かあったのか？」

「ルナが呼んでるんだよ、皆で

来てほしいってうわあああっ！！」

後半で悲鳴が上がったのは、

村であったカノンノと似た二人のカノンノ、
ピンクの髪を右で結んで紅葉の髪飾りを
つけたグラスバレーと、ピンクの髪を

三つ編みにしてチューリップのカチューシャをつけたパスカがモルモを抱きしめたからだだった。

「「よかったモルモおっ!!」」

「うわわわ落ち着いてよ、グラスバレー、パスカ!!」
結局モルモは仲間にもみくちやにされて

村に帰るのが遅れてルナに叱られたというー。

『孤独の旅人はなに思う』

ルナが立ち尽くす様子を、
黙って見つめる者がいた。

薄い空色の髪と目を
持った冷たそうな雰囲気青年だった。

彼の名前はヴェイグ||リユングベルという。

「ルナ……」

彼はルナと同郷のアイリリー出身で、
彼女と仲が良かったのだが、

ある時を境に彼女とは考えが合わなくなったのだった。

ヴェイグは旅を続けながら時折ルナを
見守って軍人をためらいもなく殺す様子に
胸を痛めたりしていたのだった。

と、ルナが気配に気づいて
あたりを見回し始めると、彼は
その前に姿を消していたー。

仲間との再会と裏切りの乙女の涙（後書き）

二話目投稿です。

ルナの過去話は

そのうち明かしていきます。

次回もよろしく願います。

もう一話投稿した後、

用語解説とかキャラ紹介

を出します。

裏切りの乙女の旅立ち

前回のあらすじ（語り

カノンノⅡイアハート）

私はカノンノⅡイアハート。

イセリア村の出身だよ！！

私は狩りに行く途中で、

ルナっていう女の子を森で見つけたの。

その子をとるあえず村に運んだんだけど、

その子を狙って軍人さんたちが村に

入り込んでしまったの。

ルナはその人達と戦って、

なんとか勝ったんだけど、

その人達を殺そうとしたの！！

私は、怖かった。

けど、必死で止めようとしたんだ。

結局、その子は殺すことをやめてくれた。

あの子と、もっと仲良くなりたいなあ。

ルナⅡチェイサーは、朝から料理に

はげんでいた。一宿一飯の恩義だと言って、

シエリアと交代するようにキッチンに入ったのだ。

その顔にはどこことなく嬉しそうだった。

料理をすることは好きらしい。

女性陣が、彼女の周りに集まっていたりした。

彼女の手際の良さに見とれている。

「何かリクエストは？」

ルナがそう言ったその時、ずらずらと

男性陣までがやってきたのでルナは一瞬びくつとなっていた。

一斉に食べたいものを言い始める。

「私、カニタマー!! 絶対カニタマー!!」

「焼き鳥丼ってできるかしら?」

「パイナップルご飯が食べたいな」

「俺はみそおでんがいいぞ!!」

「私はフルーツケーキがいいな」

「僕グラタン」

「カレー!! できたらチキンカレーで」

「……私もみそおでんで」

「スイーツで頼むぜ」

「たまご丼を久しぶりに食べたいものだな」

「俺は甘口カレーだな。好きなんだ」

「できれば、甘めな味付けがいいんだけど……」

「シーフードカレーで頼む」

「レモンパイが食べたくてよ」

「アップルパイでもいいかしら」

多種多様な発言がそこから飛び出す。

だが、ルナはしっかりとそれを聞きとって

嬉々として作り始めていた。

もちろん、自分へのマールボーカレーも忘れない。

ユーザーたちは何でもいようだ。

ちなみに、発言の主は、上からソフィー||バーンズ&シェリア、

カノン||イアハート、ロイド||アーヴィング、

コレット||ブルーネル、ジーニアス||セイジ、ルーク||セシル、

クラトス||アウリオン、ユーリ||ローウェル、ヴァン||グランツ、

アスベル||ラント、カロール||カペル、ガイ||セシル、リフィル||セ

イジ、

ティア||グランツである。

ルナは料理を作り終わると、村人たちとは離れた位置にモルモと一緒に座っていた。黙々とマーボーカレーを口に運んでいる。カノンノ、ソフィ、シェリア、コレット、ティアが彼女を囲むように座り始めた。

眉をしかめたものの、ルナは文句を言わない。

「ルナ、文句言わないんだね」

「うるさい、モルモ」

少し耳を赤くしながら笑顔のモルモに言葉を

叩きつけるルナ。ぽああつと光が散ったのは、その時だった。

ルナの顔が同時に明るく輝く。

反乱軍『ディセンダー』の仲間たちがやってきたのだ。

ミトスとユージーンもルナがいた位置に近づいたー・

「「ルナあああっ!!」」

「ルナ姉さん、無事でよかったぜ!!」

「ルナお姉ちゃん!!」

「お嬢様!!」

「ルナ、よかったわ、怪我がなくて」

一番先にやってきたのは三つ編みにしたピンクの髪と、右で結えた同じ髪をした二人の少女で、ルナは同時に抱きつかれて押し倒されていた。

いたたと声をあげて彼女は呻く。

「パスカ、グラスバレー!! 離れてくれ……」

しかし、ピンクの髪を三つ編みにしてチューリップのカチューシャをつけたカノンノもパスカも、

ピンクの髪を右で結えて紅葉の髪飾りをつけた

カノンノもグラスバレーも首を振るばかりで離れなかった。

ルナはまるで姉のような慈愛に満ちた顔をしている。

「わ、私と、同じ、顔!？」

カノンノは驚きを隠せなかった。

パスカと呼ばれた少女も、グラスバレーと呼ばれた少女もカノンノとよく似ていたのだ。

村の少年であるジーニアスⅡセイジも

驚いたように二人の少女を見つめていた。

いきなりの客人はまだまだいた。

ルナを姉さんと言ったのは、黒髪に緑の瞳をしたルーⅡユグドラシルで、お姉ちゃんと言ったのは

ルナと同じ髪と瞳を持つルミナⅡキャスタニエだった。

苗字が違うことから分かると思うが、この三人の間に血のつながりはない。

ルナとルーとルミナは義姉弟だった。

青と白の毛並みをして羽根を生やした生物はロックスプリングス（通称ロックス）、

赤い毛並みをした羽根の生えた生物はパニールとそれぞれいった。モルモと同じくルナの守護精霊だ。

ロックスはルナを「お嬢様」と呼んで敬い、

パニールはルナのことを娘のように思っている。

さらに人数はどんどん増えて行き、イセリア村の住人はためらったような顔になっていた。

ここで、ようやくパスカとグラスバレーが

ルナから離れたようだ。だが、再びやってきた

癖のある銀の髪の女の子メルⅡフォートと、妖精のような姿をした小さな女の子エトス、ピンクの髪をツインテールにした

プレセアⅡコンバティールがルナに抱きついていた。

「メル、エト、プレセア、君たちもか……」

「ルナさん、心配したんですよ……」

「ルナってば全然連絡もしないで……」

ボクたち心配したんだから」

「……マスター、よくご無事で」

ルナは照れたように赤くなりつつ、強く抱きしめられて痛みにうめいていた。ルナはメンバーに好かれているようだ。

まだまだメンバーはたくさんいた。

「メルってばさー、『ルナさんは大丈夫かな?』って毎日しくしく泣いてたんだぜ?」

「ディオっ!!」

「あいてっ!! ほんとのことだろお!？」

同じく癖のある銀の髪をした少年ディオⅡフォートが笑いながら言うと、メルは顔を真っ赤にして怒ると

ルナからいったん離れて彼にげんこつをくらわせていた。

ディオが涙目でメルを睨みつけて口ゲンカが始まる。

彼女と入れ違いに、別の少女がルナに抱きついていていた。

髪を右で結って大きな飛来刃を背負った女の子ナンド。

「リーダー!! 怪我がなくてなによりです!!」

「いや、怪我はしてるのだが……」

ためらいがちにルナは言うが、プレセアもナンもルナの守護精霊のエトスも聞き入れてくれなかった。

だいぶ回復しているの、まあ大丈夫なのだが。

そんな仲間たちを、一人の女性がくすりと笑いながら、一人の少年があきれながら見つめていた。

鮮やかな緑の髪の少年スパードⅡベルフォルマ、黒髪の優しげな女性ジュデイスⅡシーフォである。

ルナもまた苦笑しながら二人を見つめていた。

と、抱きつく三人を制止する声がある。

「おいおい、ルナが困っているだろう、離してやれ」

「ルナ!! 御無事ですか!!」

渋々ながら三人はルナを解放していた。

最初に止めたのは黒髪の短髪に眼鏡をかけた青年ウィルⅡレイナードだった。

彼の隣にいるのがルナを慕っている、

金髪の男性ミルハウストⅡセルカークである。

「ウィル、助かった」

ルナは彼にそう声をかけると、抱きつかれたせいでぐしゃぐしゃになった髪を結び直した。

「ジェイはいないのか、ミルハウスト？」

「僕はここにいますよ」

まだ本部に仲間がいることを思い出したルナはミルハウストに聞こうとしたが、すでに彼女の隣につややかな黒髪を持った少年ジェイが立っていた。小柄で整った顔をしているため、女の子にも見える。

これが本部にいる者全員だった。

他にも、旅をしているメンバーもいるし、本部以外の場所で活動している者もいるから、これで全員という訳ではないのだが。

「さあ、話し合いを始めようか。旅に出たい者は挙手、残りたいものは手を下げたままにしている」

ちらほらと手が上がった。手を挙げたのは、パスカ、グラスバレー、ジェイ、ミルハウスト、ルミナ、ウィル、ロックス、ジュデイス、スパード、プレセア、ナンだった。

「私、今度こそあなたと一緒に行きたい」

「私だって、あなたと離れたくないわ」

「ルナさんは僕が守ります」

「ルナと共に行きます」

「僕、ルナお姉ちゃんのおかげでエミル兄ちゃんを助けることができたから、今度は僕がお姉ちゃんを助けて力になるよ」

「次こそ連合軍は壊滅させて見せる」

「僕はお嬢様と今度こそ一緒にいたいです」

「私もリーダーと一緒に行くわ」

「俺もルナと一緒にいくぜ」

「私の居場所は、マスターのそばです」

「ルナさんと一緒に行きたいです」

残ることを希望しているのは、今のところ

ディオ、メル、ルー、エトス、パニール、ユージーンだった。

ミトスはまだ迷っているようだ。

「俺はここに残るよ。ほとんど行くみたいだし」

「俺もここに残るぜ。村の守り手も必要なんだろう？」

「ミトスは？」

「僕は……まだ、分からない……」

「じゃあ一旦残れ。気が変わったら、いつでもおいで。待っているから」

「うん、分かったよ、リーダー」

ルナの顔はかなり優しい。カノンノはどこか悔しげな顔でそれを見つめていた。

と、プレセアとナンの顔を熱っぽく見る

二つの視線があった。ジーニアスとカロルド。

「あ、あのぼ、ぼぼぼ僕……」

「近づかないで!!」

ジーニアスがあいさつしようと近づいた。

プレセアが悲鳴のような声を上げ、ジーニアスの目が悲しげに曇る。

「あなた、そんな言い方しなくてもいいでしょう!？」

「私に命令しないで。私の主人はルナ様だけ」

カノンノがきつい口調で言って彼女を睨むと、

プレセアもまたきつい口調でぴしゃりとさえぎった。

ルナがため息をつきながらいさめる。

「落ち着くのだよ、二人とも。特にプレセア、

今のはあなたが悪い」

「でも、この人がいきなり近づいてきたから……」

「いい訳は聞かない。ジーニアスに謝りなさい」

顔を真っ赤にしながらも、プレセアはルナの言うことに従って気のない様子で彼に謝った。

「悪いね。彼女は、対人恐怖症というか、小さい頃の記憶のせいで極端に人を嫌うのだよ。」

でも、この村ならそれも治せるかもしれない」

「マスター、何ですか!?!」

「これはリーダーとしての命令だ。」

プレセア、村に残りなさい」

プレセアはお前のせいだとばかりにジーニアスを

睨みつけたが、斧を振りまわしながら彼女から離れた。

ルナはナンにも同じことを言い、カロールに「ナンを頼んだ」と告げた。

ナンは当然怒ったけれど、ルナには逆らえないように従った。

あいさつをし、そのまま村から出て行くとする彼らを、

コレット、ロイド、ティア、ルーク、ソフィ、アスベル、

シェリア、ジーニアス、カノンノ、ユーリが止めた。

「待って、ルナ」

「何か?」

カノンノは決意を秘めた瞳をしていた。

何かと聞き返され、一言言う。

「私も、連れて行って」

「はあ?!?!」

ルナの紅い目がまん丸に見開かれる。

他のメンバーも懇願し始めた。

援護するように、クラトス達も前に出る。

ロイドが叫ぶように言ったのを皮切りに、

他のメンバーもルナに訴えかけた。

「お願いだ、俺も連れて行ってくれ!!」

俺、強くなりたいんだ!! コレットを、

皆を守るくらいに強く……」

「私も、連れて行って下さい。

私、過去の記憶がないんです。

だから、記憶の欠片を探したいんです!!」

「俺も記憶を取り戻したいんだ!!」

「ソフィ達を守りたいんだ!!」

「私も、アスベル達を守りたい……」

「君は、僕のこの能力について

知っているの!？」

だったら僕は君についていきたい」

「軍の真実が知りたい。だから、私も連れて行って」

「私だってアスベル達を守る力が欲しいわ!!」

「軍は根絶やし、だったか? 軍には俺の親友がいるんだよ。

もし、軍がそこまで腐っているって言うんなら、俺は

それをあいつに知らせなくちゃなんねえな」

「私、あなたの力になりたいの!!」

ロイドの、コレットの、ルークの、アスベルの、ソフィの、

ジーニアスの、ティアの、シェリアの、ユーリの、カノンノの、

真摯な言葉とまっすぐな瞳がルナを射抜く。

ルナは黙っていた。彼らの想いは、決意は、反対したところで

揺るぐことはない。反乱軍『ディセンダー』と全く同じものだった。

「ロイドとコレットを頼むわ。あなたがここで認めないなら、

二人は黙って村を出て行くはずよ」

「ルークを、守ってやってくれ」

「皆本気だ。反対されても旅はやめないだろう。

つきまとわれることになるぞ」

「だが……」

クラトスとリフィルに脅しの様な言葉を言われ、

ルナはためらったように言葉を濁した。

他のメンバーは黙ってルナだけを見つめている。

「皆に教える自信がないのだろう、殺戮天使殿は」

「何だと……？」

ルナはどう断ったものかと考えたが、クラトスの冷たい言葉に唇をかみしめた。

ぎらりと紅い瞳が狂気を帯びてきらめく。

「教える自信があるのなら、彼らを連れて行くがよからう」

「望むところだ」

ロイドたちの顔が明るく輝いた。

ただし、とルナが睨むように彼らを見回していく。

「勝手についてこられて野垂れ死にされても迷惑だ、

ついてくるがいい。ただし、私の期待を裏切った

役立たずは、見捨てるがな」

「ルナ、そんな言い方!!」

グラスバレーが口をはさもうとする。

ルナは人睨みで黙らせると、もう一度全員を見回した。

「役に立たないと判断した者は、そうそうに一人で

村にお帰りいただく。それに、私はあなた方を守れなくても

責任を負うことはできないが、それでも、共に行くと？」

ごくり、とロイドたちの喉が鳴った。

それは脅しではなかった。冷たい笑みがそれを否定している。

本気だった。もしへまでもしようものなら、本気で

彼女はこの中の誰であろうと見捨ててしまうのだろう。

「こっちこそ望むところだ!!」

叫んだのは、アスベルだった。他の者たちも、

我も我もと声を上げる。

くっ、とルナがいかにも楽しげに笑った。

「そうこなくてはな」

こうして、村人とディセンダーの数名は

旅に出ることになったのだった――。

自己紹介をしよう、と言いだしたのはロイドだった。荷造りを終えて村を出てから、すぐにそう言ったのだ。スパーダ、ルナがめんどろそう顔になる。

「遊びにきているんじゃないんだぞ」

「遊びじゃない！！ これからのためにも、いろいろなことを知っておいた方がいいだろ？ まずは、あんたからな」

あんた、と指差されたのはルナである。

チツと舌を打ちつつも口を開いた。

「ルナⅡチェイサー。反乱軍『ディセンダー』のリーダーだ。武器は弓とヨーヨーとナイフ。以上」

「ええ、短いよう！！ 趣味とかも教えてよ！！」

カノンノが文句を言う。ルナは再び舌打ちした。

「趣味は読書と料理。以上」

「じゃあ次は俺だな。ロイドⅡアーヴィング。イセリア村の村人だ。武器は双剣、好きなものはみそおでん、趣味は細工物を作ることだ、よろしくな！！」

「これ、ロイドに作ってもらったんだよ」

ロイドは楽しそうに愛華たちに自己紹介をした。

コレットが首から下げられた繊細な造りのペンダントを取り出して彼らに見せる。

ルナはあまりに美しさに思わず見入ってしまった。

「以外だな……」

ポツリと呟いた言葉は、ロイドには聞こえなかったようだ。

「次は私ね？ カノンノⅡグラスバレー。好きな食べ物は

シナモンロールだよ、武器は大剣、趣味は、絵を書くこと！！

ええっ、イアハートって私そっくり！！」

「ええっ、今気がついたの、グラスバレーちゃん！？

にっこりと笑いながらグラスバレーも自己紹介した。

今更ながらにカノンノが自分にそっくりなことに気付き、ルミナが驚いたように突っ込んでいる。

次指名されたのは、ジーニアスだった。

「えーっと、ジーニアスⅡセイジだよ。」

イセリア村の住人で、好きなものはグラタンかな」

それで、とジーニアスはルナを見つめた。

ルナは感情のない紅い目で黙って見返す。

「君は、スペルキル能力、って言ったよね？」

僕の力……それについて何か知ってるの？」

「スペルキル能力は、かなりレアな能力だ。」

無詠唱ですべての術を使うことができる。

あなた以外に、使うことができる人を

私は知らない……っと、話はこれまでのようだ」

ジェイ、ジュデイス、ミルハウスト、ウィル、スパードが構えていた。

ルミナとロックスはカノンノ達をかばうようにして武器を握りしめている。

楽しげに笑っているのはルナだけのようだった。

グラスバレーとパスカはいつでも攻撃ができるように、

下級術の詠唱をすでに始めている。

ロイド達は気配に気づかなかった自分たちに愕然としていた。

実力が違いすぎる。彼らは、わずかな気配さえも

見逃さないのだ。

びりびりと殺気の波の様なものが周囲に散る。

それは、ルナから発されているようだった。

「皆、手を出すな、私が殺る」

全員が構えを解いて後退した。コレット達にも、もう少し離れるようにとパスカが指示を出していた。

ルナの笑みが暗く深いものへと変わっていく。

「出てこい、そこにいるのは分かっている」

「さすがですねえ」

音もなく草むらから出てきたのは、茶髪に近い金の髪を

した紅い瞳の軍人だった。武器は長い槍で、ルナの殺気を笑顔のままで受け止めていた。

「マルクト軍大佐、ジェイド・カーティスか。

あんたには個人的な恨みがあるのだよ。

仲間を殺された恨み、思いしれ」

「私はあなたを殺す気はありませんよ。生け捕りにしろと命令が来ていますからね」

「生け捕り、だと……？」

ルナは眉をひそめてジェイドを睨みつけた。

彼女は逆に殺したが、あの時の軍人からは恐怖と殺意が感じ取られたのだった。この男からは、それはない。

ルナを殺す気がないと言うのは本当なのだろう。

「情報が、食い違っている……？」

「それでは、始めましょうか」

「望むところ……！」

こうして、一対一の戦いが始まった――。

一番先に動いたのはジェイドだった。

彼はルナが声をかけた時には、すでに上級術の詠唱を終えていたのだ。

「フリジットコフィン……！」

「何……？」

いきなり術が発動し、驚いたルナは高く跳んだ。

今までルナがいた場所を氷柱が貫く。

ルナの笑みがさらに暗くなった。

ジェイドが接近して槍の攻撃を放ち始める。

そこで、ルナの様子が一変した。

「多少はやるようだな。だが――」

「……！」

「あ・ま・い・の・だ・よ？」

ルナは一瞬のうちにジェイドの背後に移動していた。
きらめく白刃が彼の背に当てられている。

「早い……油断、しましたか……!!」

ルナはもう笑ってさえない。

ジェイドは明らかに本気で戦っていなかった。

殺さないようにとの配慮もあったのだろう。

彼はルナとの戦いに手を抜いていた。

そのことがルナを怒らせたのだ。

「敵に情けをかけられるとは、私も落ちたものなのだね!!」

「ぐっ……!!」

ナイフがジェイドの肩を切り裂いた。

真っ赤な花びらが散るかのように血が噴き出す。

イセリア村の住人たちの悲鳴が上がった。

「残念なのだね、本気で戦っていれば、お前は

死なずに済んだというのに」

死ね、とルナは冷たく言い切った。

ジェイドは槍を構えたものの、青ざめた顔で

ルナを見つめるばかりだった。

振りかぶられたナイフが彼の首筋を

狙って振り下ろされる。

さらに高くなる悲鳴、絶叫。

目を閉じるディセンダーのメンバー達。

そして――。

「やめろ、ルナッ!!」

「っ!!」

ルナに体当たりをするように飛び出してきたものがあつた。
もの、というのは的確な表現ではないだろう。

それは人だった。淡い空色の髪を三つ編みにした青年だ。

ルナの紅い瞳が驚きに見開かれる。

「ヴェイグ……? ヴェイグ||リユングベルか!!」

ルナの隙をつくように、ジェイドが立ち上がった後退していた。悔しげな表情を浮かべながらも去ろうとしている。

「待て!!」

それに気づいたルナがナイフを投げつけた。

さつき傷を受けた場所にささり、うめき声上がる。

ヴェイグがルナの手をひねるように掴みあげた。

「やめろって言ってんだろう、ルナ!!」

「何故、お前は軍人ごときをかばう!!」

「全ての軍人が、腐っている訳じゃない!!」

ルナの手を握る手に力が込められる。

舌打ちしたルナは抵抗をやめてため息をついた。

ヴェイグがルナの手を解放し、ルナはまだじんじんと痛む手をさすりながら彼を睨みつける。

すでにジェイドはいなかった。

「あいつは、私の仲間の仇なのだよ!!」

何も、知らないくせに……

軍人の味方をするというのか!？」

「違う!! 俺は軍人の味方じゃない、

軍をやめたことだって知っているだろう!？」

「話なんて、聞く耳持たないのだよ!!」

すっかり頭に血が上っているルナはヴェイグの言葉に耳を貸そうとはしなかった。

仲間の仇との再会、手を抜かれたことの怒り、

仲間の仇を討つことができなかった痛みで

ルナは完全に逆上していた。

「戦うしか、ないか……」

ヨーヨーを構えて突っ込んでくるルナに、

舌打ちをしたヴェイグは大剣セルシウスキャリバーを構えて迎え撃つのだったー。

おまけ短編『姉を探す者』

一人の少年が真剣な顔で歩いていった。
森の中を黙って歩いている。

黄色がかった茶色の肩までの髪に

空のように青い瞳の女の子にも見える子だ。

彼がやってきたのは、イセリア村だ。

「あの……ここに、アリアⅡカノンという

子が来ませんでしたか？ 僕と同じ髪を

三つ編みにしているんですけど……」

「アリア？ ひょっとして、アリス達と来た子かしら。

容姿がそんな感じだったわ」

リフィルが彼女にそう言った時、プレセアが斧を
構えてミトスやユージーンに止められていた。

「アリアとかいう子の仲間ということは、
ルナ様を狙っているんですね。

やんのか、あ？」

「ちよっと、プレセア落ち着いて!!」

「落ち着け、まだ敵だと決まった訳じゃないぞ」

リフィルはプレセアをちらりと見てため息をつくと、

アルトⅡカノンと名乗った彼に事情を話した。

一瞬嬉しそうになった彼がしだいにまた

悲しげな顔になる。

「姉さんが村人に手を出した!？」

なんということを……」

「でも、先に手を出したのはこちらよ。その子は、私たちが
介入したから手を出したまでだと思うわ」

リフィルがフォローしたものの、アルトの表情は
変わらなかった。

「ありがとうございます……ごさいました……」

「ちょっとお待ちなさい！！　あなた、大丈夫なの！？」

ふらつきがちになった彼が心配でリフィルは

声をかけたが、彼はそのままどこかへと行ってしまっていたー。

『つけ狙われる青年』

はあはあと息を切らせる声がその場に響いている。

声の主は、長い紫の髪に紅い瞳と緑の瞳のオッドアイの青年だった。

「どこにいったのだ、奴は！！」

青年の耳に怒鳴るような苛立ったような声が聞こえていた。

彼はさらに声をさけるように走り出す。

怒鳴るような声には侮蔑の響きさえあった。

「実験体風情が、脱走するなど！！」

早く探しだせ！！　逃がしたらとんでもないことになるぞ！！」

風情という言葉に、青年は悲しげな顔をしたけれど、

何も言わずに足を速めた。彼の名前はリュウライカという。

実験体としてどこからか連れてこられた子だ。

とある重要な任務を言いつけられたのだが、人を傷つけるのが

苦手な彼はそれを機に連合軍から脱走したのだった。

今は逃げている最中である。

きらり、と首にかけられた首飾りがきらめいていたー。

『隻眼の旅人』

暗闇を駆ける二人の少年少女がいた。

一人は紫の髪を二つ結びにしている、活発そうだ。

もう一人は、青い髪を後ろで一つに結っていて、

いかにも学者という雰囲気だった。

「め、メルディ、少し、待ってくれ！！」

「キール、遅いよう！！　早くルナがコト

リヒターに知らせないと大変だな!!」

メルディⅡバリルはキールⅡツアイベルに
懇願されて頬を膨らませていた。

「メルディと、キールか？」

「リヒター!! 会いたかったな!!」

あのなら、ルナが大変よ!!

軍がスパイしてることバレたな!!

追われているそうだよ!!」

「何だと、それは本当なのか、メルディ!？」

長い赤い髪に眼鏡をかけた青年

リヒターⅡアーベントは、メルディの言葉に
ぎよっとなったようだった。

メルディの言葉を聞くだけでは切迫した

状況は伝わって来ないが、彼女の紫の

瞳は潤んでいてかなり真剣なのは間違いなかった。

「分かった、すぐにルナのところに向かう」

「今はメルディたち動けないから頼むな!!」

「助かった、リヒター……!!」

息を切らせる二人を見えない目で見ると、

リヒターはエターナルカードを使って姿を消した――。

『充電』

「ええ、ルー残るの!？」

パスカは不満そうに頬を膨らませていた。

ルーは困ったように眉をつり上げていた。

「だって、ルミナも行くみたいだし、

他にもたくさん行くなって言ってるし」

言い訳の様なことを並び立てながらじりじりと
後退していくルー。しかし、パスカは逆に

どんどん近づいていた。

「会えない間の、充電？」

「な、なななな、ぱ、ぱぱパスカ／／！！」

手を握られたルーがトマトのような顔色になる。

ルナは肩をすくめていた。

「相変わらず、尻に敷かれているのな、ルーは」

「少しでも仕事で離れることがあると、あれだ」

「よくあきずにやるものよね」

スパードとジュディスがあきれたように呟く。

そのまま彼らは助けにくれと見つめてくるルーを
放置したのだったー。

裏切りの乙女の旅立ち（後書き）

ついにルナが旅立ちます。

どんどん増えて行く仲間たち。

いきなる戦うことになるルナ。

勝敗は！？ 彼女はどのようなのか！？

第一回キャラ紹介&用語紹介

ルナⅡチェイサー

キムラスカ軍に所属していた反乱軍

反乱軍『ディセンダー』のスパイでリーダー。

そのことがバレ、軍に追われている。

しかし、公式には裏切ったことにされているらしい。

境遇のせいで若干ひねくれてすさんでいるが、根はやさしい。

家族や仲間以外の者を信頼していないので刺々しい

態度を取ることがある。クールな部分もあるが好戦的。

モルモ

ルナの守護精霊の一人、という一匹。

小さい頃から一緒にいて仲が良かったため、

言いたいことを言い合える仲。

カノンノⅡイアハート

イセリア村人。

いつも張り切っている純粋な少女。

人を拒絶しながらも、優しいところの

あるルナに魅かれている。

キサラギモモ
如月桃

キムラスカ軍の少女。

ルナとは仲が良かったが、

裏切りの知らせを受けショックを受けた。

幼いせいか、誰の事も「兄様姉様」と呼ぶ。

アリアⅡカノン

モモと同じくキムラスカ軍の人間。
孤児で身寄りがないため、軍属の
知り合いに引き取られている。
血のつながった弟がいるらしい。

ジーニアスⅡセイジ
イセリア村の村人。

カノンノとは仲がいい。
何故か特殊な力を持っている。

アリス

連合軍『ヴァンガード』の部隊長。
通称？サドのアリス？。

かわいい顔に反したサディスティックな性格で、
デクス以外の者には恐れられている。

デクス

連合軍『ヴァンガード』の部隊員。
通称？3Kデクス？。

メロメロ香をつけているため、
ルナのもっとも苦手な相手。

アリスのことを愛しているらしい。

ヒルダⅡランブリング

本人曰くただの占い師。

ルナ達を助けて武器を投げつけた後、
そのまま拾って帰って行った。

ミトスⅡユグドラシル

反乱軍『ディセクター』の隊員。

ルナ同様、楽しかった過去を軍に奪われた少年。失踪した姉を探している。

ユージンⅡガラルド

反乱軍『ディセンダー』特別部隊隊長。
過去、キムラスカとマルクトの戦いで養子にしていた息子を亡くしている。

スパードⅡベルフォルマ

反乱軍『ディセンダー』隊員。
少し不良じみた話し方をするが、優しい。
仲間以外には心を許さない。

ジュデイス

反乱軍『ディセンダー』隊員。
事情があり、あまり人を信頼しなくなった。
しかし、仲間だけは信頼している。

ウィルⅡレイナード

反乱軍『ディセンダー』第二部隊隊長。
父親のような優しい性格で、ディセンダーのお父さんの存在。しかし、軍の上層部の人間を憎んでおりその時には冷徹な顔がのぞかせる。

ミルハウストⅡセルカーク

反乱軍『ディセンダー』第三部隊長。
元キムラスカ軍所属だが、軍の上層部のやっっていることを偶然見てしまい絶望して軍をやめ反乱軍に加入した。

ジエイ

反乱軍『ディセンダー』偵察部隊隊長。
冷静沈着な部分が多く笑うことはないが、
仲間のことは信頼しているらしい。

ヴェイグ||リユングベル

ルナと同郷のアイリリー出身の旅人で、
彼女の幼馴染。かなり仲がいい。

元は軍所属で、実の親が死んだあと引き取ってくれた
両親や大事な妹を殺され一時期性格が歪んでいて
ルナ同様残虐に人を殺してきたが、とある出会いに
よって人を殺すことをやめた。

表情も変えずに人を殺すルナに悲しい想いを
抱いている。次回、ルナと戦う予定。

用語紹介

連合軍

マルクトとキムラスカで
構成された特別軍。

『ヴァンガード』はその一部。

エターナルカード

空間を移動したりさせたり
できるレアなカード。

闇市場で購入できる。
非常に高価。

反乱軍『ディセンダー』

ルナがリーダーをしている組織。

軍と書いてあるが、軍属との関係はない。
復讐を誓う者、または国を変えたいと
思う者たちで構成されている。

教会の盾『オラクル』

教会警護団体で、教会の使者たち
で構成されている。

大量殺人をするルナを
捕まえようと狙っているらしい。

キムラスカ軍&マルクト軍
両国は隣り合っており、合併している。
上層部はルナ曰く悪の巣窟。
その理由は後に明かされる。

第一回キャラ紹介&用語紹介（後書き）

今回はキャラ紹介と用語紹介だけです。
お話を楽しみにしていかがたすみません。
次回はちゃんとお話に戻ります。

裏切りの乙女と幼馴染激突

前回のあらすじ

(語りモルモ)

オイラはモルモ!! ルナの守護精霊だよ!!
え? 守護精霊って何かって?

その名の通りルナを守る精霊だよ。

……っと話がずれちゃったね。

オイラの主であり、相棒であるルナは、
反乱軍『ディセnder』のリーダー。

彼女は軍、っていうか軍の上層部を
憎んでいるんだ。ルナは新たに得た仲間と
旅に出るんだけど、そこに仲間の仇である
ジェイド||カーティスがやってきた。

彼を殺そうとするルナを止めたのは、
彼女の幼馴染のユウキ。

すっかり激昂したルナは彼と戦うことになっただけどー。

(説明ながっ!! b y ルミナ)

常人には見えないほどのナイフの舞い。
殺戮天使という通称にぴったりの動きを、
しかし、ヴェイグ||リュングベルは見事に
自らの大剣で受けていた。

それをはらはらしながら見守るのは、
カノン||イアハート、シェリア||バーンズ、
アスベル||ラント、ロイド||アーヴィング、
コレット||ブルーネル、ルーク||セシル、
ジーニアス||セイジだ。

ちなみに、ティアⅡグランツは空中を浮いているロックスとモルモを熱っぽい視線で見つめていたという。

「モルモ、彼は誰なの？」

カノンⅡパスカ、通称パスカが言った。

他の者たちも彼のことを知らないことから、

『ディセンダー』ではないのだろうとロイド達は思った。

「ヴェイグは、ルナの幼馴染なんだ。仲がすごくよかったんだけど、ここ数年意見が対立しちゃって」

「ひょっとして、ルナさんが誘おうとしているけど入らない人物って彼のことですか？」

ジェイが口を開いた。こくこくとモルモが頷く。

「そうだよ。ヴェイグはルナの行動、人を殺すことをよく思っていないみたいなんだ」

「それは、私もよく思っていないけど……」

続いて口を開いたのは、カノンⅡグラスバレー、通称グラスバレーだった。

彼女もルナに人殺しをやめさせようとする一人だったりする。

「今は話をやめて、二人の戦いを見守った方がいいんじゃないか？」

「そ、そうですね！！　ごめんなさい、ウィルさん」

ウィルⅡレイナードにたしなめられ、慌てて

グラスバレー達はルナとヴェイグに視線を戻した。

「あのヴェイグって奴、すごい強いね、多分」

ルミナⅡキャスタニエの言葉は、さらに

カノンⅡ達の不安をあおったのだったー。

ルナは紅き瞳に炎を宿しながらヴェイグと戦っていた。

それとは正反対に、ヴェイグの瞳は冷静である。

「お前は変わってしまったみたいだな、あの頃はあんなに優しくかったのに……」

悲しげな色がヴェイグの瞳にまじった。

それには気がつかず、ルナは獣のように吠える。

「変わったのは、そっちの方だ!!」

あんな二つ名が嘘のように大人しくなったのだね!!」

金属と金属がぶつかり合う音がその場に響いていた。

ルナのナイフとヴェイグの大剣が火花を散らす。

ヴェイグはまだ本気をだしていないため、激昂して

集中力が定まらないルナとの力はほぼ互角で拮抗していた。

「（やはり、強い。だけど、私だって譲れないものがある!!）」

ルナは少しずつ頭が冷えて来て、冷静さを取り戻してきた。

だけど、負ける気などもっとうない。

たとえ、幼い頃ならいざ知らず、彼が成長してからは

いっさい勝てなくなった相手でも。

「これは、どうかなっ!!」

ルナは身軽なのを利用して木に飛び移った。

ナイフの代わりに、自身の武器大弓『セレネ』を取りだす。

月と龍を模した矢が一斉に彼に襲い掛かった。

だが――。

「月閃龍連打!!」

「甘い!!」

ヴェイグは自身の武器セルシウスキャリバー

でもって矢をたたき落とした。

全ては無理だったけれど、後の残りも少し

身を引いてかわしてしまう。

「ルナが、あんなに苦戦するなんて」

「ルナ……」

「お嬢様……」

ルナが苦戦しているところなど見たこともない

『ディセンドー』の面々も少し心配そうな顔になっていた。

スパーダⅡベルフォルマとミルハウストⅡセルカークと

ロックスが驚きのあまり目を見開いていた。

「頑張れ、相棒!! 負けるな!!」

「ルナ頑張って!! でも、怪我しないでね!!」

モルモとパスカの応援の声が響き渡る。

グラスバレー、ウィル、ジェイも応援を始めた。

「まだいけるよ、ルナー!!」

「お前の力はそこまでではないはずだ」

「負けないでください、ルナさん!!」

イセリア村の人々も声を張り上げる。

「ルナなら勝てるよ、頑張って!!」

「負けないで、ルナ……!!」

「俺も応援しているからな!!」

「皆でルナを応援しようぜ!! イセリア村の誓い
第七条、なんでも協力してやろう、だ!!」

「それ勝手にお前が考えたんだろ」

「ああ、ロックスとモルモかわいすぎる／＼／」

「ティア目を覚ませ!! 今はそんなこと
している場合じゃないだろ!!」

「ルナ頑張って!!」

「負けちゃ駄目よ」

上から、コレット、ソフィ、アスベル、ロイド、
ユーリ、ティア、ルーク、ジーニアス、シェリアの発言だ。

ユーリはロイドの勝手な誓い作りに突っ込み、
ティアはふわふわ浮いているロックスとモルモに
いまだ夢中でルークが突っ込んでいた。

「どうしたルナ? もう降参か?」

木の上で動かないルナにヴェイグは一旦剣を降ろした。
ルナは下を向いて動く様子がない。

しかし、彼が構えを解いた時、キツと顔を上げると
木の上から飛び降りて蹴りを見舞おうとした。

「甘いつて言ってるだろう!! 何度お前と

戦わされたと思っている？ お前のパターンなんてお見通しだ!!」
「くっ!!」

ルナは足を掴まれ、空中に放り投げられた。
どうやらヴェイグは油断したフリをしてルナの攻撃を誘い、
彼女の攻撃をかわしたようだ。

「いつまでも、負けっぱなしじゃないのだよ!!」

ルナが吠える声が再び響き渡る。

彼女の口元にかわいらしい笑みが浮かんだ。

「何!? これは……」

実はルナは投げられた際にとっさにヨーヨーの糸を
ヴェイグの武器にからませていたのだ。

ルナはヨーヨーを強く引くと、からみついたセルシウスキャリバ
ーを

ヴェイグの行動の範囲外に放り投げた。

しかし、ヴェイグはまだ隠し持っていた
大剣ストーンエッジを装備し直していた。

「少しは成長したみたいだな、だが、まだ俺には武器が残っている。
二度同じ攻撃をくらうほど、俺は愚か者じゃない」

「そんなの、分かっているのだよ」

はあはあとルナの口から吐息が漏れ始めた。

疲れ始めてきたことを気取られないために

ルナはきつい口調で言い放った。

ルナは、ヴェイグが本気をだしていないことを知っていた。

彼が幼い頃は、彼がかなり大人しかったこともあり、

ルナが打ち負かして（無論本気ではなく）いたものだが、
彼が成長してからはすっかり立場が逆転したのだった。

「来ないならこっちから行くぞ、ルナ」

ヴェイグがストーンエッジを構えた。

ルナは同時に地を蹴ってとげを出したヨーヨーを振りまわす。

「桜花乱舞!!」

ルナはくるくると舞いながらヨーヨーを振りまわした。
まるで桜の花が舞い散るかのような連劇だ。

ヴェイグは身を引いたが、さすがにすべてはよけきれず腕にわずかな傷を負った。

思ったほど攻撃が当たらなかったのを見てルナが舌打ちする。

「あんまり成長はしてないみたいだな。確かに、少しは成長しているみたいだな」

少しを強調して言うヴェイグに、ルナの顔が悔しげに歪められた。大の大人でも殺すことのできるルナ。

しかし、何度挑みかかっても彼にだけは勝てないのだった。

「いつまでも、お前と遊んでいる暇はない。」

これで決めるぞ」

びくっ、とルナの体が跳ね上がった。

弓を構えたままじりじりと後退する。

「ルナお姉ちゃんが、ここまで怖がるなんて。」

どうな技なんだろう」

「ちよっとルミナ！！ どっちを応援してるのよ！！」

ルミナがうっかり彼の技に興味を持って

しまったため、グラスバレーが厳しい声でたしなめた。

「龍虎滅牙陣！！」

「うわああああああっ！！」

切りつけられたルナは地面にたたきつけられた。

勝負は、ヴェイグの勝ちである。

またしても勝てなかった悔しさでルナは喚き散らした。

「くっ、悔しい！！ 悔しすぎる！！」

ヴェイグが手を差し伸べたが、ルナはキッと睨みつけるとそのまま自分で立ち上がった。

ジェイが彼女に声をかける。

「大丈夫ですか、ルナさん？」

「……大丈夫、なの、だよ……」

本人はそう言うてはいるものの、ルナの顔色は悪かった。
だいぶ疲れてしまっているようだ。

「フェアリーサークル!!」

「ヒール!!」

シェリアとカノンノが回復術をかけると、
彼女の顔色は少し良くなった。

拗ねたようにうつむいているので、
ロックスがそんな彼女を叱る。

「お嬢様!! 何かをしてもらったら、
きちんとお礼を言わなくては駄目です!!」

「そうだよ、相棒!! シェリアとカノンノに
お礼をいいなよ!!」

耳元でごちゃごちゃ言われたルナは一旦耳に
指をつっこんだけれど、ちらりと二人を見やって口を開いた。

「どうもありがとな」

はたから聞いても心が籠っていないのは
明らかだ。ロックスとモルモの責める様な目を
やりすごし、ルナはヴェイグに目を向けた。

「……それで、ヴェイグは何か私に用だったのかね？」

「お前、連合軍の女を殺そうとしただろう」

「なっ!!? み、見ていたのか……」

ルナは罰が悪そうに目をそらした。

ヴェイグはそんな彼女の肩を掴んで自分の方を向かせる。

「俺もお前達『ディセンダー』についていく」

「入ってくれるのか!？」

入団に応じてくれたのかとルナの顔がぱあつと輝いた。

しかし、ヴェイグは冷たい声でそれを断じた。

「勘違いするな、入る気はない。お前をまっとうにするために、
同行してやるって言ってるんだ」

「そんな勝手なこと認められないのだよ!!」

「負けたお前に、決定権なんてあると思うか？」

「あうううううっ／＼／＼」

こうして、『ディセンダー』とイセリア村の村人たちは、新たな仲間を得て再び旅を続けるのだったー。

その頃、イセリア村ではー。

ユージーンⅡガラルド、ミトスⅡユグドラシル、

プレセアⅡコンバティール、ナン、エトス、

ディオⅡフォート&メル、パニール、

ルーⅡユグドラシルが村人たちに混じって作業をしていた。

プレセアはぶつぶつ言いながらむくれていたが。

「手伝ってくれて、助かってよ。特に、パニールやエトスは料理が上手だし」

「リフィルさん料理できないもんね」

「何ですって、カロール!？」

「うわあああああつ、ごめんなさいリフィルさん!!」

パニールとエトスを褒めた際にカロールが小声で

言った言葉を聞き逃さず、リフィルに拳を振り上げられたカロールは涙目で謝っていた。

プレセアがつまらなそうに鼻をならす。

ディオとメルは笑っていたが、ミトスの表情は少し曇っていた。

「ミトス、行かないのか？」

薪割りが終わらせたルーが、いつの間にかミトスの横に座っていた。

「姉さん、探すんだろ？ この村が心配なのはわかるけど、ここにはたくさんの人がいる。

元軍人の奴らだっているんだ、ここは大丈夫だぜ」

「……でも……」

「いけよ、このままここにいたって、真実は見えてなんて来ない。

まだ、あんたの姉さんが彼、ティトレイを殺したって限らないだろう？」

ミトスが迷っている理由、それは、真実を知るのが少し怖いのだった。

彼の姉、マーテルⅡユグドラシルは、ミトスの友人であるティトレイを殺したとされているのだった。

それが真実なのかは、まだ分かっていない。

それともう一つは、この村が心配だったのだった。

ミトスは平和な村に暮らしていたがある日突然それを軍属に奪われた過去を持っている。

「……うん。行くよ」

ミトスが顔を上げると、にっ、とルーはにこやかに笑った。

他の仲間にも言いに行ったので、プレセア達は口々に彼の行動を応援した。一人、自分のことしか

考えていない人もいたが。

「ミトス兄ちゃん頑張れ！！」

「今からなら、まだルナさん達に追いつけると思いますよ」

「いいですか？ マスターに会ったら無事でいることとか連絡してくださいね。手紙でもいいですから」

「……プレセア、それはちよっと。

ミトス、無茶はしないでよね」

「お姉さんが見つかるといいね、ボクも応援してるから」

「怪我とかしないでくださいね」

「ルナ達を頼んだぞ」

「何かあったら連絡しろよ、いつでも俺たちの誰かが駆け付けるから」

ディオ、メル、プレセア、ナン、エトス、パニール、ユージーン、ルーの順に彼らは発言した。ルーの言葉の後、ディオが茶化して怒ったルーが追いかけて、鬼ごっこが始まる。

「ルー兄ちゃんだったら足手まといだと思っけどね」

「てめ、ディオ!! 茶化すんじゃねえよ!!」

プレセアとメルがため息をつく。

ミトスはそんな彼らが見えなくなるまで手を降っていたー。

一方、こちらはルナ率いる反乱軍とイセリア村人（+ヴェイグ）。

ルナは負けた悔しさで若干むくれていた。

毛を逆立てた猫のように、ポニーテールの髪が少し立って見える。

「まだ拗ねてるのか?」

「拗ねてない!!」

ヴェイグに顔をのぞきこまれたルナは、カッと少しとがった歯をむき出して威嚇したが、そんなことでヴェイグがびびるはずはなく、ただ笑われたただけだった。

「うろうろう」

「ルナ、少し落ち着こうよ」

「うろうろううろうう」

グラスバレーがそう言ったものの、ルナはさらにむくれるばかりだった。スパーダとジュデイスはあきれ顔である。

その肩をぽんと叩いたのはジェイだった。

「にゃっ!? な、何だジェイか」

「和菓子食べますか?」

「……うん……」

ジェイが和菓子を取り出してなだめたので、ルナは少し機嫌を直して

もらった和菓子をかじり始めた。

水筒に入っていた緑茶をすする。

と、その瞳に殺気のようなものが宿った。

いち早く気づいたのは、近くにいたジェイだ。

「ルナさん、どうしました!?!」

「誰かが、こっちを見ている。そこだ!!」

「……うわ」

ルナがナイフを投げると、小さく呟いて少年が飛び出してきた。その少年は、紫の髪に緑と紅の瞳をしていた。

その首には、ルナがしていたのと同じ発信器つきのペンダントがかかっていた。

胸に留められた名札の名は『リュウライカ』。

ルナはまだ殺気を込めた瞳で彼を睨んでいる。

「私の前で、立ち聞きとはいい度胸なのだね。」

この私が、ルナ⇨チェイサーと知っての行動か？」

「君、ルナ？」

その言葉を聞いた時、ルナの頭にカツと血が上った。止めようとするカノンノを振り払うように前に出る。

きらり、とナイフが陽光にきらめいた。

「お前!! 軍の人間だな!？」

私は、まだ殺される訳にも、

捕まる訳にもいかないのだよ!!」

「……ちよつと、待て。僕……」

リュウは持っていた双銃で防衛しようとしたが、急に力を抜いた。彼は生きていてもしょうがないと思いきこんでいたのだ。彼には、味方がいない。

如月桃キサラギモモやアリア⇨カノンとは

仲が良かったが、軍を抜け出した今となっては彼女たちも味方にはなりえないだろう。

急に銃を降ろしたリュウに、ルナは目を見張って攻撃をやめた。彼の意図をはかりかねたのだろう。

「……こいつ、まさか……」

ルナの瞳から殺気が消えた。代わりに、口元に浮かんだのは怪しげな笑み。

グラスバレーがびくつとなつたのを、ほとんどの

者が見逃していた。

「お前、死にたいのか？」

リュウは答えなかった。ただ武器を構えず、ルナの方を向きもしない。

だが、その態度が肯定の証になっていた。

ルナがぎゅっと痛いぐらいの力でナイフの柄を握りしめる。

「ルナ、やめろ！！」

ヴェイグの制止の声が響く。しかし、ルナは一見かわいらしい悪魔の笑みを浮かべると、思い切りナイフを――。

正確にはナイフの柄を、彼の頭に叩きつけた。

ガキンツと鈍い音が森中に聞こえ、それに驚いた鳥たちが一斉に空へと舞い上がった。

「誰が殺してなんかやるか、馬鹿」

茫然としているイセリア村の村人と『ディセンダー』のメンバー達。ジェイやウィル、スパード、ジュデイスなど例外はいたが。彼女が何をするか分かっていたのだろう。

頭をおさえたまま彼らと同じように茫然としている

リュウの腕を掴むと、ルナはそのまま彼を睨み据えた。

「私は、殺そうと狙ってきた奴らは殺すことにしている。軍の上層部や連合軍の奴らも同じだ」

ルナは怒っていた。殺気ではない怒りのオーラが、彼女の体からあふれ出ている。

「今まで何人殺したかなんて、いちいち数えてなんかいない。綺麗ごとなんか言う気はないけど、私は、まだ生きられるのに生きようとしないう奴が、一番大っ嫌いなんだ！！」

ギリツと握られた腕に力が込められた。

ルナはさらにきつい目で彼を睨む。

「お前、何があったか知らないけど、生きてるんだろう？
だったら何故生きようとしないうんだ！！」

ルナは過去に一度死にかけたこともあるし、何人も死んでいったものをその目で見ている。

だから、彼女は自殺をするもの、自ら殺されたがるものを嫌っていた。

「ルナが、あんなことを言うなんて」

「彼女は、ただの殺人鬼じゃないからね。

殺す人を選んでももの。まあ、それでも誰かを殺すことはいけないんだろうけどね」

軍の人間を平気で殺す彼女の言葉に、
ヴェイグはぽつりと呟いた。

ルミナがルナに聞こえない声で呟き返す。

誰もどうしていいのか分からず動かなかった。

それに気づいたのは、ジェイとルナだ。

「この匂いは……」

「ああ、奴らだ」

ルナは一旦リュウの腕を離すと、『ディセンドー』達や村人たちに指示を飛ばした。

「皆、散れっ！！ 追手が来る！！」

にわかなチームを作り、奴らと戦え。

ただし、殺すな。殺した奴には罰を与える」

「ルナが殺すなって言うなんて、珍しいね」

グラスバレーが目を見張った。ルナは表情も変えずに言い放つ。

「追っては軍の人間ではない。教会の使者だ。

奴らは香をたきしめた衣服をまとっているからすぐに分かる。

だが、軍の人間がまぎれこんでいても私には判別できない。

教会の奴らは私たちを殺す気はないが、軍の人間にはある。

その場合だけ殺せ」

こくりと『ディセンドー』達が頷き、それぞれに

チーム分けを始めた。イセリア村の村人たちも

慌てながらチームに入っていく。

「お前は、こっちに来い!!」

ルナはリュウの腕を掴むと、五つに分かれた道の一方第五の道を走り出した。ヴェイグ、ジェイ、モルモも彼女に続く。

ルミナ、カノンノ、グラスバレー、イアハート、

ジーニアスのチームは第四の道を走り抜ける。

ウィル、ロイド、コレット、シェリアのチームは第二、

ミルハウスト、ルーク、ティア、ユーリ、ロックスのチームは第三、スパード、ジュデイス、アスベル、ソフィは第一の道を行ったー。

まずは第五ルートのルナ達。

ルナは彼の腕を掴んだまま、警戒するようにあたりを見回していた。ちなみに、リュウの首にかかった

首飾りはジェイに壊してもらったようだ。

と、その顔が急に安堵の顔になり、彼女の体から余計な力が抜けた。

向こう側からやってきたのは、彼女の仲間リヒターアーベントだった。

目立つ赤毛に隻瞳を持っている。

「リヒター!! 久しぶり!!」

モルモが彼の周りを飛び回り始めた。

ルナも笑顔になって彼に駆け寄る。

「無事みたいだな、ルナ」

「君も無事でよかったのだよ、リヒター!!」

ヴェイグがジェイに知り合いかと聞いて

ジェイが『デイセNDER』の仲間だと

答えているがルナには聞こえていなかった。

「メルディとキールに、お前のスパイ行動がバレたと聞いてきたんだ」

「メルディ達も、無事、なのだよね?」

「ああ、無事だ」

「……リヒター。よけろ!!」

「言われなくとも」

ルナは急に表情を変えると身を引きながらリヒターに指示を出した。リヒターは気づいていたようで、彼女の指示が来る前にそこをどいている。

ジェイとヴェイグが武器を構えた。

ルナはリュウを後ろにかばって前に出る。

いつの間にか、この前戦ったアリアⅡカノンがそこには立っていた。

ルナは黙ってナイフを構え、女性と対峙するのだったー。

おまけ短編『実はいました』

※このお話は、ルナがイセリア村の村人に食事を作っている時のお話です。

※ちなみに彼女たちは最初にルナを襲撃して逃げられた教会の使者です。

さまざまな料理を内容を聞き取り料理をしていくルナ。それを、遠くからじっと見張っている者たちがいた。

教会の使者『オラクル』である。

ぐうううっきゅるるる、と彼女たちのお腹は切ない音を立てていた。

「あーん、もうっ!! お腹すいたあ!!」

叫んでいたのは、リーダー各の水色の髪をした女性アンジュⅡセレーナである。

「あ、あたしも、お腹すいた……」

「アニスちゃん、もう限界……」

赤毛の二挺拳銃の少女イリア・アニーミも、

黒髪のスィンテールでぬいぐるみに乗った少女

アニス・タトリンもお腹を押さえつつ呻いている。

「わ、私も恥ずかしながら……」

「朝から何も食べてないもんね……」

後の二人、長い金髪の女性ミント・アドネードと

濃いピンクの髪に花の髪飾りの少女ルビア・ナトウィック

の顔は真っ赤だった。

「何で、旅だっていうのにあんなたくさん食料積んでるのよお!!」

絶対に捕まえてやるんだから!!」

「アンジュさん、それ私怨入ってます!!」

アンジュがお腹を押さえながら本部へと退却していく際に

私怨がかなり籠った発言をしたのでミントが突っ込んでいた――。

『負けず嫌いの苦悩』

※これはルナ達が全員本部にいた時のお話です。

「うううううう」

ルナは唸りながら一点を見つめていた。

その紅い目は若干涙目で、見つめているのはカードである。

今現在ルナはジェイとポーカーの一騎打ち中だった。

「泣くくらいならやめたら、ルナ」

「うるさいのだよ、ミトス!! 私に絶対にジェイに

勝って見せる!! どうか絶対に!!」

「気長に待ってますよ」

「うわああああん!! また負けたあああつ!!」

ミトスが泣くならやめたらと忠告したが、

ルナはうるさいと言いながら勝負を続行する。

そして、ジェイに見事打ち負かされていた。

「もう一回!! もう一回なのだよ!!」

「……もう二十回もやってますよ」

「そろそろ代わって欲しいんだけどな」

「もう諦めたら? ルナ」

「もう一回い」

ルナは賭けごとに関しては運がいい方なのだが、
どうしてもジェイには勝つことができないのだった。

二十回連続で負けてもまた挑むルナに、ジェイと
スパーダとジュデイスは呆れてしまっていた。

二十一回目も二十二回目もルナが負けたのは
言うまでもないー。

裏切りの乙女と幼馴染激突（後書き）

ちよつとテイルズキャラの性格が
違う人がいますがすみません。

紹介分を出したら書きたくなったので
また投稿します。

次回もよろしくお願いします。

裏切りの乙女たちと教会の使者達との戦い

前回のあらすじ

(語りジーニアスⅡセイジ)

僕はジーニアス。イセリア村の村人なんだ。

僕達は今、反乱軍ディセンダーの皆と

行動を共にしているんだよ。

ルナと幼馴染のヴェイグが戦ったり、

リュウっていう子が死のうとしてルナが

説教したりと本当にいろいろあったんだ。

そして、僕達は教会の使者と戦うために

カノンノ、グラスバレー、パスカ、ルミナと

チームに分かれて道を進んだんだけどー。

ルミナⅡキャスタニエ、ジーニアスⅡセイジ、

カノンノⅡイアハート、カノンノⅡグラスバレー、

カノンノⅡパスカは敵の姿を発見して立ち止った。

つんつんと立った金髪の少年がルミナ達を

睨みつけている。

活発そうな印象だが、その目はどこか冷たかった。

「俺は、お前達みたいな平気で人を殺す奴を許せない!!」

少年はいきなり剣を構えて襲い掛かってきた。

ジーニアスとカノンノに下がるように指示をした

ルミナが剣でそれを受け止め、火花が散る。

「カイル!! 突っ走るのはやめるんだ!!」

「もうっ!! また単独行動!?!」

茶に近い金髪に紅いバンダナを巻いた青年が

怒鳴るが、カイルと呼ばれた少年は聞かなかった。

赤い髪と瞳の少年の言葉も無視される。

「平気じゃないよ。平気な訳ないじゃない!!」

ルナお姉ちゃんたちの苦労とか、何も

知らない癖に、勝手なこと言うなっ!!」

ルミナが構えた剣に力が籠った。

力負けしたカイルが吹き飛ばされ、慌てて受け身を取って
威力を殺す。銀髪の青年がため息をついた。

「カイルⅡデュナミス君。殺気をひっこめなさい、
殺すなど言われていただろう」

「だって、だって、ウッドロウさん!!」

「だってじゃありませんカイル!!」

私たちは教会の使者です!!」

なおも文句を言おうとするカイルを、濃いピンクの
髪をツインテールにした少女がいさめた。

「私たちが、ディセンドーみたいなことを
していい訳がありません!!」

「……ごめん、チェルシー……」

みたいなこと、と言われたグラスバレーと
パスカが緑の瞳で少女を睨みつけた。

「みたいな、こと……。こっちが平気で
人を殺しているみたい……」

「私たちだって、ルナだって意味なく
殺したりしないのに……」

睨まれていることなど露知らず、彼らは
五人をそのままに話し合いを始めた。

戦うことを決めたのだろう、

敵側の五人はルミナ達の前にそれぞれやってきた。

「俺たちは教会の使者『シグルス』だ!!」

お前達ディセンドーをつかまえるためにやってきた!!」
金髪の少年カイルⅡデュナミスがルミナに接近した。

ルミナは一步後ろに引きながら彼を睨みつける。

「ルミナ!!! 私も!!!」

パスカが大剣を構えて前に出ようとする。

しかし、銀髪の青年ウッドロウ・ケルヴィンがそれを妨害した。

「君の相手は私だ」

「分かったわ、私たちは捕まる訳にはいかない!!!」

だから戦う!!!」

パスカとウッドロウが睨みあった。

カノンノ、グラスバレー、ジーニアスにもそれぞれが近づく。

「僕の相手は君だヨ!!! ヤシの木の髪飾りのお姉さん!!!」

「失礼ね!!! これヤシの木じゃないもん!!!」

「女の子か、戦いにくいけど、君の相手は僕だ」

「女だからって馬鹿にしないで!!!」

「あなたの相手は私です!!! チェルシー・トーン!!!」

弓匠アルバの孫娘をなめないでくださいね!!!」

カノンノは赤毛の少年マオ、グラスバレーは茶に近い髪

の少年クレス・アルベイン、ジーニアスはピンクの髪の少女

チェルシー・トーンと戦うことになった。

弓匠アルバとは、キムラスカ・マルクト間の戦いで

殉職した有名な射手だ。

この少女はその血をひいているようだ。

「行きます!!! 疾風!!!」

「うわあ!!!」

放たれた矢をジーニアスは回避した。

その途端、いくつかの火球が少女に襲い掛かる。

ファイアーボールだ。

「また、この力……」

どうして僕はこんなことが……」

「よそ見をしないでください!!!」

斜陽!!!」

「うぐっ!!!」

今度はまともに直撃した。

肩を蹴られたジーニアスがその場に転がる。

「ジーニアス!!」

「敵前逃亡を見逃すほど、僕は甘くないヨ!!」

ガスティーネイル!!」

「きゃあああああああっ!!」

ジーニアスのところに駆け寄ろうとした

カノンノにマオの風の術が直撃した。

「カノンノ!! ごめん君どいて!!」

「えっいきなりライトニング!？」

どうなってきゃあああああっ!!」

ジーニアスがカノンノのところに向かおうとした時だった。

無詠唱でライトニングが放たれたことに驚くチェルシー。

ジーニアスの魔術が直撃し彼女は膝をついた。

チェルシーが攻撃を受けぎよとなったマオの前に

ジーニアスが飛び出す。

「カノンノ、下がってて!!」

「う、うん……!!」

「二対一でも負けないからネ!!」

バーンストライク!!」

キツと炎のような目で二人を睨むマオ。

チェルシーが倒れる前から詠唱を始めていたらしく、

炎の術がジーニアス達を取りまいた。

とっさに彼は無詠唱でダイダルウェイブを放った。

火が瞬く間に消滅し、マオが青ざめて立ち尽くす。

「嘘、ボクの炎が……!!」

「さっきのお返しよ!!」 桜牙爆碎斬!!」

「悪く思わないでね!!」 サンダーブレード!!」

「うわあああああああっ!!」

マオもまたその場に倒れ伏した。

カノンノは笑顔を浮かべて彼に歩み寄る。

「やったね、ジーニマス!!」

「……」

「ど、どうしたの!？」

「頭が……」

ジーニマスはその場に膝をついた。

尋常でないほど頭が痛んだのだ。

ジーニマスの脳裏にさまざまな情報が飛来した。

幼い頃のジーニマスが何者かに運ばれている。

幼い頃の彼は何か叫んでいるようだが、その声は

ジーニマスには聞こえなかった。

『おい、見ろよ○○○○だ!! 連れてきたぜ!!』

『あのけいかくの○○○○? だってまだこどもじゃないの』

大柄な大人ばかりが存在する中、一人だけ

幼い五歳ほどの少女が混じっていた。

肩までの金の髪に紅い瞳、

大人びた表情は男たちを冷やかに見上げていた。

それは一緒に旅をしているルナに似ていた。

彼らは軍人らしく軍服をまとっていた。

『ルナ。お前も見に行くか? 面白いことになるぜ?』

『いい。きょうみない、そんなあくしゅみな』

『釣れねえなあ』

『つれなくてけっこうよさわらないで!!』

情報はこれだけだった。

男たちに肩を掴まれた少女が振り払って出て行く。

ぷつり、とラジオの電源が切れるかのように

ジーニマスはその場で意識を失った。

倒れ掛かってきたジーニマスを慌てて

カノンノが抱きとめる。

「ジーニマス!! どうしたの

ジーニアスううううっ!!」

カノンノの悲鳴と、グラスバレー達の戦う音だけがその場には響いていたー。

同じころ、ユーリⅡローウェル、ロックス、

ミルハウストⅡセルカーク、

ルークⅡセシル、ティアⅡグランツもまた

敵と対峙していた。

「覚悟!! よーし、イけるイける!!」

「ちっ。女か、やりにくいな、蒼破刃!!」

いきなり地を蹴って攻撃を見舞ったのは

深い緑色の髪をした少女ファラⅡエルステッドだった。

狙われたユーリが攻撃をよけつつ剣気を飛ばす。

勝手に戦いが始まったので、ため息をつきながら

黒髪をショートカットにした女性ルーティⅡカトレットが

ナイフを構えてティアに近づいた。

「あたしたちは教会の使者『シグルス』よ。

あんたたちを捕まえに来たわ」

「私たちは、まだ捕まる訳にはいきません!!」

ナイフとナイフが火花を散らした。

だが、所詮は素人のティアは

彼女に押されて一步下がっている。

厳密に言えばルークとティアとユーリは

『ディセンダー』ではない。

しかし、今ここでそれを言っても彼女たちが

聞くわけではないし、どうにもならないから彼らは黙っていた。

「もーっ何で勝手に戦い始めてんのよ、ファラもルーティも!!」

あんた、あたしと勝負しなさい!!」

「えっ、俺!？」

「あなたの相手は私ですね」

「女性でも手加減はしません」

「よ、よろしく願います!!」

「いえこちらこそよろしく願います」

「ってそこ!! 何ほのぼのしてるのよ!!」

短い茶髪の学者風の少女リタⅡモルディオが

ルークを指名した。当のルークはびっくりしたように自分を指でさすばかりだ。

緑の髪を三つ編みにした女性フィリアⅡフィリスが悲しげな顔をしながらミルハウストを

見たが、彼は表情を変えなかった。

おどおどした銀髪の少年ルカⅡミルダが、ナイフを構えたロックスに向き合う。ロックスが礼儀正しく返したので、リタのツツコミが炸裂した。

「はああっ、掌底破!! 飛燕連脚!! 三散華!!」

「牙狼撃!! 円閃牙!! 幻狼斬!!」

「いくぞ!!」

「こちらも行きます!!」

まさに力と力のぶつかり合いだった。

教会の使者は、実力があるものもいれないものもいる。

その能力はまちまちだ。

少なくとも、ユーリとミルハウストが戦った相手には実力はあった。

「ノクターナルライト!! セヴァードフェイト!!」

「スナイプロア!!」

ルーティはリーダー各に見えたがそこまで強い

訳ではないらしく、ティアとの実力はそこまで違わなかった。

自分でも勝てるかもしれない。

そう思ったティアの

スピードはしだいに早くなっていった。

「グランドダッシャー!!」

「うわあああああっ!!」

「まだまだ行くわよ♪ タイダルウェイブ!!」

「くっ!! 近づけない!!」

一方ルークはリタにもてあそばれていた。

リタはほぼ無詠唱で術を発動させている。

フィリアと戦いながらその様子を見ていた

ミルハウストは、長引かせるのは得策ではないと判断した。

それはロックスも同様の様だ。

「ルカ様これで決めさせていただきます!!」

イノセントエッジ!!」

「えっ、まだ戦ってな……うわあああああっ!!」

哀れな銀髪の少年ルカは戦い始めてロックスに

ナイフ技を決められ膝をついた。

「これで終わりにしましょうか」

「分かりました」

フィリアは真剣な顔になった。

本気を出さなければ負ける。

彼女は戦う内にミルハウストの実力を知ったのだった。

「セイクリッドブレイム!!」

「碎牙連火閃!!」

二人はほぼ同時に秘奥義を放った。

しかし、ミルハウストの方が少し早かった。

砕かれた岩の粒が炎をまとって飛んでくる。

直撃を受けたフィリアは思わず悲鳴を上げた。

「きゃあああああああっ!!」

身動きが取れなくなった彼女に、ミルハウストは

自らの武器の切っ先を向けた。

「降参してください」

「仕方ありませんね、負けてしまいましたもの。

ルーティさんたち帰りましょう」

ため息をついたフィリアが指示を出す時、

ぶつぶつ言いながら三人は武器をおさめた。

気絶したルカをズルズルとリタが引きずっていく。

「これから面白くなりそうだったのに……」

「私たちがたびれ損って訳？ 捕まえれば

報奨金とか出たかもしれないのに!!」

「まったく次は別の仕事がしたいわね」

リタが『エターナルカード』掲げると、

次の瞬間彼女たちはその場から消えていた――。

ウィルⅡレイナード、ロイドⅡアーヴィング、

コレットⅡブルーネル、シェリアⅡバーンスは

敵と会う前に仲間と対面を果たしていた。

「ミトス、お前も旅に出たんだな」

「ウィルさん、シェリアさん、

ロイド、コレット!!」

「ミトス!! 久しぶり」

「これからよろしくな!!」

「私もさんづけ……?」

確かにちよつと年上だけど」

それは、以前村に残っていたが

ルナ達を追いかけて、そして姉を探すために

旅に出た少年ミトスⅡユグドラシルだった。

ロイド、コレット、シェリアも口々に

声をかけて行く。

「やっぱり姉さんを探すんだな」

「……うん……とても、怖いけど

でも僕も真実が知りたいから」

「そうか」

温かい微笑みを浮かべるウィル。

と、その顔が急に無表情へと変わった。

ミトスも武器を取り出して構えている。

「この反応は……ひょっとして敵!？」

「やっぱり、戦わなくちゃいけないんだね」

「コレットは俺が守る!!」

現れたのは、黒髪の双剣師リオンⅡマグニス、短いピンクの髪の女性ハロルドⅡベルセリオス、踊りの子のような恰好をした少女アニーⅡバース、銀髪の射手チェスターⅡバークライト、黒髪の剣師クロエⅡヴァレンスだった。

「まとめてかかってこいお前達。」

僕が相手をしてやる」

「傲慢な物言いは身を滅ぼすぞ」

『はあああああつ!？』

不敵な笑みを浮かべたリオンが

挑発するようにコレット達を見ている。

ウィルはともかく、他の人物たちは

子供だとあなどったのだろう。

『シグルス』の他のメンバーは、

何も聞いていなかったらしく間の抜けた声をあげていた。

「マグナス!!! 先行するな!!!」

「リオンさん!!! 一人じゃ無茶です!!!」

「まったくしょうがねえなあ、リオンは」

「私は楽でいいけどね♪」

「「「ちよつとは心配しろよ（してください）!!!」」」

いさめるクロエとアニー。

チェスターは呆れたような顔になったけれど、

ハロルドだけはリラックスして読書にいそしんでいた。

四人が同時に突っ込みを入れている。

「ちくしょう!!! 俺たちを馬鹿にするなよ!!!」

「あ、ロイド!!!」

馬鹿にされて怒ったロイドが、コレットが止めるのも聞かずにリオンの飛びかかった。

鳩尾に蹴りを入れられ、吹き飛ばされる。

助けに入ろうとしたコレットとシェリアを巻き込み、ロイドはその場をごろごろと転がって行った。

「うわあああああっ!!」

「「きゃああああああっ!!」」

木にぶつかって止まったロイドは、

悔しげに唇を噛んでいた。

「……全然、歯が絶たなかった!!」

ちくしょう!!」

「ロイド……」

「今傷を癒すわ。ピクシーサークル!!」

シェリアが回復術をかけた時、すでに

ウィルとリオンの戦いは始まっていた。

大きなハンマーとリオンの双剣がぶつかり合う。

リオンは言うだけあって少しは実力はあるようだった。

刃を混じり合わせただけで彼の実力が分かったのだろう、睨みつけるようにウィルを見つめている。

「幻影刃!! 爪竜連牙斬!!」

「フリーズランサー!!」

戦う二人を、カヤの外の七人は茫然と

見ていることしかできなかった。

ハロルドだけはいまだ読書中だが。

「そんなものか、お前の実力は」

「まだまだだ!! 僕を甘く見るな!!」

ウィルに言われたリオンは後退すると

魔術の詠唱を始めた。

「デモンズランス!!」

暗黒の槍がタナトスに降り注ぐ。

しかし、ウィルは軽々とそれをかわした。
驚きに目を見張る彼に接近する。

「なっ……!!? うわあああああっ!!」

ハンマーの一撃をくらって動かなくなったリオンを、
ハロルドが引き起こした。

「ま、自業自得ね。じゃあ私たちはこれで♪」

「まったく、調子に乗るからこんな目に遭うんだぞ、マグナス」

「……クロエ、聞こえてねえって」

「大丈夫でしょうかりオンさん……」

彼女たちはいろいろと話しながら

エナードナルカードで姿を消した――。

ルナⅡチェイサーは、リヒターⅡアーベント、

ヴェイグⅡリユングベル、ジェイに手出しするなど言い置くと、
アリアⅡカノンと戦っていた。

リュウとモルモも彼らのところに下がっている。

「お前、あの時の軍人だな」

「あら、覚えていたのね」

話ながらも、二人はやたて笛や弓ですでに
攻撃を開始している。

両方まだ傷は付いていなかった。

「正直あんたは気に食わないが、
邪魔するのなら戦うのだよ」

「光栄ね。風の刃よ我に従え!

ウインドエッジ!」

彼女の術がルナの髪をひと房斬り落とした。

紅いリボンにもあたったため、ぷつりとリボンが
切れて金の髪が腰まで垂れ落ちる。

ルナは術が放たれた瞬間身をかわしたのだが、
術に追尾機能があったために攻撃をくらった。

身をそらしたため、髪のひとつ房だけで済んだが。

「ならばこちらも！！ 屠龍！！」

追尾技には追尾技とルナもホーミング機能のついた矢を発射した。

アリアは持っていたたて笛で器用に三つの矢を叩き落とす。

一本だけ残った矢が彼女の服の袖に傷を付けた。

「くっ！！ フォトン！！」

「しまっ……うぐうっ！！」

ルナは光の術の直撃を受けた。

一旦膝をついたがまた立ちあがる。

「なかなかやるようだね」

ルナの口元には笑みが浮かんでいた。

「だが、こちらを甘く見るな！！」

ルナはフツと姿を消した。

空中に飛び上がり、『陽炎』を使ったのだ。

頭上から蹴りをいれられたアリアは後退した。

「まだ終わらない！！ 龍炎閃！！」

さらにルナは炎をまとった矢で追撃した。

まだ彼女は範囲内にいたため、攻撃をくらう。

「うう！！ 火のつぶてよ、私に力を貸して！

ファイアーボール！！」

「うあああっ！！」

しかし、ルナも技を使用後の隙をつかれたくさんの火球の直撃を受けた。

二人の力は拮抗している。

このまま長々とやっても意味がないと気付いた二人は秘奥義を発動させた。

「月の力よ、我の前に集え！！」

月閃龍連打！！」

「ナイフレイン・ボム！！」

月と龍を模した矢がアリアに降り注ぐ。

いくつかは叩き落としたが、全部は

無理で体に矢がささっていた。

一方、ルナにもナイフの雨が降り注いでいた。

ナイフは全部よけきったものの、

そのナイフが爆薬が仕込まれたことには
気がつかなかったため、爆発した火花が

ルナの体を傷つけ再び膝をつかせた。

（さすが、殺戮天使！！ でも、

私は、まだ、戦える！！）

命令の内容は『殺戮天使』ルナの殺害。

依頼を果たそうとさらに術を放とうとするアリア。

ルナはそうはさせじとヴェイグ達のところまで

すでに退避していた。その手にあるのは

エターナルカードだ。

「お生憎様、私はあんたを殺す気はないし、
殺される理由もない」

「待ちなさい！！ まだ……！！」

にやりと笑うと、ルナはエターナルカードを使い、

スパード達のいる場所に退避した――。

スパードⅡベルフォルマ、ジュデイス、ソフィⅡバーンズ、
アスベルⅡラントはルナ達とすぐに再会することになった。

「スパード、ジュデイス！！ 無事でよかった。」

と、そこのおまけ二名も

「俺達おまけ！？」

スパード達に無事でよかったと告げるルナ。

その際におまけ扱いされた一人のアスベルが思わず突っ込んだ。

ソフィはその言葉を聞いたのか聞いていないのか、

悲しそうな顔でルナに近づいた。

「な、何なのだね!!」

「けが、してる……」

ソフィの手がルナの頬に触れた。

ちよっと赤くなりながらルナが下がる。

「こ、こんなのかすり傷だ!!」

「素直じゃないな、ルナは。」

本当は嬉しい癖に」

「か、からかうなヴェイグッ!!」

拳を振り上げてヴェイグを殴ろうとするルナ。

しかし、ヴェイグがよけたので空振りした。

身を乗り出しすぎたため、ふらつく

ルナをジェイが抱きとめた。

「大丈夫ですかルナさん!!」

「だ、大丈夫……／＼／＼」

ルナの顔は湯気がでるのではないかと思わせるほど真っ赤な顔色だった。

子供時代を思い出したヴェイグは、そういうところは変わらないんだな、と感慨にふける。

ジェイに降ろしてもらったルナは、エターナルカードを取り出して仲間と連絡を取り始めた。

「今は誰がいるんだ?」

「ロックス、モルモ、パスカ、グラスバレー、

ウィル、ミルハウスト、ルミナだ」

仲間が何人いるのかとロードに聞かれ、

ルナはイセリア村の人間と、今ここにいる

メンバー以外の名前を挙げた。

ウィルとミルハウストにすぐにここに来るようにと

指示をだしたため、そろそろと人が集まってきた。

エターナルカードは、場所だけでなく人を

指名しても移動できるのである。

「ルナ!!!」

「ミトス!!! やっぱり君も来たのか!!!」

再会を喜び合った後、ルナはルミナ達にも連絡を取ろうとした。

「おい聞こえるか!!! すぐにこちらにー」

『ジーニアスが倒れた!!! ルナどうしよう!!!』

聞こえてきたのはカノンノの声だった。

大声だったため、ルナは嫌そうに一旦カードを離す。

そしてまた手に取った。

「倒れた? それはどういうことかね?

怪我をしているとか?」

『違うの。怪我はしてるけど、そこまで深くないから。

あのね、急に頭が痛いって言って倒れちゃったの!!!』

「分かった。こちらに彼を連れてこれるかね?」

『まだ敵がいて、パスカとグラスバレーが戦っているの!!!

ルミナがパスカのサポートに入っただけで、

倒せなくて……』

「分かった。そちらに行く」

ルナはパスカの名を呼ぶとエターナルカードを発動させた。

瞬時にルナ達は、彼女達の居る場所にやってきた。

ルミナがカイルを撃破したため、残りの敵は二人。

パスカ、ルミナがウッドロウ、グラスバレーがクレスと

いまだ交戦中である。

カノンノはジーニアスを抱えているため、戦闘に入れないようだ。

「モルモ!!! 行け!!!」

「分かった相棒!!!」

モルモは目にもとまらぬ速さでウッドロウとクレスに

突っ込んでいった。驚き動きが止まる彼らの隙を

ついて、ルナが指示を飛ばす。

「ルミナ!!! パスカ!!! グラスバレー、カノンノ退けっ!!!」

「「「了解!!」「」」」

ルミナ達はルナ達がいる方向に駆けだした。

その後を、シヴァを抱きかかえたカノンノが急ぐ。

モルモも素早く退避し、クレスとウッドロウが気づいた時にはもう彼らはそこにはいなかった。

全員と合流したルナ達は、移動した先に敵がいないことを確認すると、そこで一旦休むことにして英気を養うのだったー。

おまけ短編 『ルナの過去』

目を覚ましたジーニアスは、皿を拭いているルナにとあることを質問した。

「あの、ルナ？」

「どうしたのかね？ 早く料理を食べてくれないと片付けができないのだが」

心配していたことを悟られないようになのだろう、ルナの言葉はどことなく棘があった。

素直じゃないルナは、彼に「心配していた」という一言を言うことができなかったのだ。

ジーニアスは慌てて料理を食べ始めた。

「それで何が聞きたいのか？」

「ルナって、五歳くらいの時軍にいた？」

ルナの顔色が青くなった。

手が滑ってしまい、パリンと皿の割れる音が響く。

「何故、君がそれを？ 確かに私は五歳の時私兵という立場で軍にいたけど……」

「分からない。でも、頭に浮かんだんだ。

軍人がたくさんいて、その中に君がいた」

ルナの体が小刻みに震える。

青を通り越してしだいに顔色は白くなっていた。

その時の自分がなんて呼ばれていたのか
聞こうとしたけれど、ルナが膝をついてしまった
ためそれ以上聞くことはできなかった。

『その後のアリス達』

アリスは悔しげに唇を噛みながら、
デクスを蹴り飛ばして憂さ晴らしをしていた。

「アリスちゃんに恥をかかせるなんて、

あの女どうしてやろうかしら。

デクスうざいどっかいて」

「そんなアリスちゃあああん!!」

どっかいてと言われたデクスが喚くが、

アリスはそれを見無視して鞭を自分の掌に当てていた。

如月桃『キサラギモモ』は悲しげな顔をしているだけだ。

「ルナ姉様、どうして裏切ったの……?」

内容は少し違えど、彼女達の目的は一緒だった。

ルナⅡチェイサーとまた出会うことー。

『彼女の視線先には?』

※このお話はミトスが

『ディセクター』と合流する前です。

ウェーブした黒い髪の女性が立っていた。

以前ルナ達を助けたヒルダⅡランブリングである。

彼女は何かを見つめていた。

その視線の先には、一人の少年がいた。

ミトスである。

ミトスは彼女には気がついていないのだろう。

彼女の方を見もしなかった。

彼は知らない。この女性と会うことになることを――。

『姉を探して』

アルトⅡカノンはふらつきながら歩いていた。かじっているのは、大きな肉饅頭である。

「姉さん……どこにいるの……」

彼の様子を見れば誰かが声をかけそうなものだが、誰も彼に声をかけたりしなかった。

あの娘の血縁者、とかあざけりの声が聞こえる。

近くの村に住まう者たちは決して彼を助けの手を差し出そうとはしなかった。

後に彼は意外な人物達と出会うのだが、

それはまた別のお話――。

裏切りの乙女たちと教会の使者達との戦い（後書き）

ちよつと順番は狂いましたが、こちらを
投稿させていただきました。

他の作品も徐々に投稿する予定です。

裏切りの乙女の姉妹達

前回のあらすじ

(語りシエリアⅡバーンズ)

私はシエリアⅡバーンズ。

イセリア村の村人で、ソフィの姉よ。

血はつながってないけど、私たちは

仲のいい姉妹なの。ごめんなさい、話がずれたわね。

私たちは前回教会の使者と戦ったのよ。

こちらは、主にウィルさんが戦っていたから

私は回復術をかけていただけだけど。

これからも頑張らなくちゃね!!

ルーⅡユグドラシルはあくびを噛み殺しながら

洗濯物を洗っていた。ちなみに、これは男の分だけで、

女の分はパニールが嬉々として洗っていた。

脳裏に浮かぶのは、昨日やってきたルミナの実の兄だという

エミルⅡキャスタニエの姿だった。

『ぼ、僕はディセンダーのみなさんに協力します!!』

ディセンダーのおかげで僕達はこうしていられる訳ですから』

『ディセンダー』のリーダーであるルナⅡチェイサーは、

おとり捜査の最中にエミルの救出をルー達にさせた。

ルーとルミナがへまをしてしまい、結局ルナは正体が

バレてしまったのだが。

「ルーさん、手が止まっていますよ?」

「えっ、あ、ああっ!!! ご、ごめんパニール!!!」

ルーは慌てて手を動かした。と、籠においてあった

洗濯物の一部がごっそり消えている。

「俺も手伝うぜ」

「あ、ありがとうユーージーン！！ 本当にすまねえ！！」

洗濯物の一部を抱えているのはユーージーンⅡガラルドだ。

ルーは恐縮して彼に頭を下げる。

しかし、ユーージーンは優しげな笑みを浮かべて

ルーの頭を痛くない程度に叩いて気にするなと言った。

楽しそうな笑い声が聞こえて来ていることから、

ディオ達はエミル達と楽しく食事をしているのだろう。

二人だけ、いかにもつまらなそうな顔をしている人たちもいるが。

プレセアⅡコンバティールは焼き立てのパンを頬ぼりながら仏頂面だった。

温かいスープを飲んでいるナンも同様である。

彼女たちはまだルナが自分を置いていったことを根に持っているようだ。

「ナ、ナナナナナナン、あの、このパン僕が焼いたんだよ！！」

こっちのフルーツが入っているのも食べてみる？」

カロールⅡカペルが必死に声をかけるものの、

ナンはどこ吹く風で機械的に食事を続けていた。

エトスが母親の顔で二人を叱る。

「こら、ナン！！ せっかくカロールが

声をかけてくれてるんだから！！」

エトスに叱られたナンは気に食わなそうにカロールを

睨みながらも嫌々会話を始めた。

そこに、洗濯ものを干し終えたルー達が戻ってきた。

「まあまあ、おいしそうね、今日は誰が食事を作ったの？」

「僕だよ！！ 何か味が足りないとかそういうことが

あったらいつでも言ってね？ 僕もつと料理が

うまくなりたいから！！」

「あら、とってもおいしいわよ」

今日のメニユーは、クロワッサンとバターロール、

野菜たっぷりのクリームスープ、ふわふわに焼き上げた目玉焼き、

ほどよく焦げ目のついたハム、ポテトサラダ、作りたての新鮮なバター、

キイチゴのジャム、蜂蜜だった。

ほとんどの人がジャムをつけていたが、甘いのが駄目なルーだけはパンにバターを塗って食べていた。

かなりおいしい味に、プレセアとナン以外の手はどんどんパンやおかずに伸びていた。

綺麗に食べてもらったナンは嬉しそうだ。

「……ところで」

食後のコーヒーを飲んでいたクラトスⅡアウリオンが、口をぬぐっているエミルに目を止めた。

エミルはちよつと怯えたような顔をしている。

「な、なんですか？」

「お前たちはどうしてここに来たんだ？」

事情を話忘れていたことに気付いた彼は、ルーと一緒に村の人達全員に事情を伝えた。

『ディセNDER』ははつきりと事情を知っているが、

他の人達はまるきり知らなかったのだ。

「ルー兄ちゃんすきありっ!!」

「あああっ!! 俺のハム!!」

「ディオなにしてるの!!! ルーさんすみません」

「あなたたちうるさくてよ!!!」

ルーが話しているうちに、ディオⅡフォートがちゃっかりルーの皿からハムを盗っていた。ルーが喚き、その姉であるメルⅡフォートがディオを叱りつつルーに謝る。

ルーが半泣きでディオに掴みかかろうとしたが、

リフィルにディオと共にげんこつを落とされて静まったのは余談だ。

ルーは悪くないような気がするが、メル以外は誰も同情はしなかったという。

メルが食事の終わった皿を重ね、ユージンがカロールを

手伝って食後のプチケーキの載った皿を運んできた時のことだった。

「ルナ！！　ルナ！！　どこにいるの！？　

せっかく会いに来たのに！」

「ルナ姐！！　うちも会いに来たのじゃ！！」

少女達の声が聞こえたと思うや、ピンクの髪をポニーテールに結った少女と海賊風な恰好をした少女がバルカ達の前に姿を現した。

初めてみる少女たちの姿に、『ディセンドー』も村人たちもいぶかしげな顔をしていた。

ピンクの髪の少女アーチェⅡチェイサーがたまたま近くにいたルーをキッと睨みつけた。ぎよっとなってルーが立ち上がる。

彼女は荒い足取りでルーに近づいたため、女性の急接近を受けたルーの顔はトマトのような色に変わっていた。

「ルナはどこにいるの！？　あたしルナの姉なんだから！！　隠すと許さないわよ！！」

「ルナ姐！！　どこにいるのじゃ！！」

「ルナの姉っていうのはどういうことだ？」

口もきけないルーに変わってユージーンが尋ねた。

海賊服の少女パティⅡチェイサーが答える。

「うち達はルナ姐の姉妹じゃ！！」

血のつながりはないがのう」

「そうよ、あたしたちはルナの姉妹なの。

何年も会ってないけど、軍の人間に追われているって聞いていてもたってもいられなくなったの」

ルーはようやく落ち着いたようで、アーチェの澄んだ赤い目を見つめ返した。血のつながりはないと言ったけど、その目は若干ルナより色が淡いものの良く似ていた。

「ルナはこの村から出てったんだよ。『ディセンドー』の事は知ってるのか？」

「そんなの知ってるわよ」

「『ディセンドー』の数人とここの村人連れて旅に

出ちゃったんだよ」

アーチェは明らかに顔をしかめた。せっかく発信器を横流ししてもらったのに、とか不穏な言葉をぶつぶつ言っている。そして、何故かルーを家の裏手に引っ張り込んでいった。魔術の匂いと爆発音、ルーの悲鳴が聞こえたが誰も助けなかったというー。

一方、ルナ達は昨日の疲れが残っていたのか、一部の人間を除いていつもより遅い時間に起きていた。

ちなみに、その一部は、ウィルⅡレイナード、ミルハウストⅡセルカーク、ジュデイス、ジェイ、ヴェイグⅡリユングベル、ロックス、シェリアⅡバーンズである。

シェリア、ロックス、ヴェイグ、ジュデイスが料理を作っていたので、その匂いで起きたルナⅡチェイサーは、すっかり明るくなった空を見て恥ずかしそうにしていた。

「ううつ、寝過した……」

「お嬢様、気になさらないでください。

食事は僕達が作っておきましたから」

「そうよ！！　ルナもたまには遅く起きなくちゃ！！」

「……コーヒーが入ったぞ。熱いから気をつけろ」

「今日はルナさんの好きなマーボーカレーにしてもらいました」

ロックス、シェリア、ヴェイグ、ジェイの順でルナに声をかけた。ヴェイグからまだ熱いコーヒーを受け取ったルナは、まだ寝ぼけていたのか

覚まさずに飲んで「熱っ」と呟いた。

ヴェイグがあきれたようにため息をつき、ルナが涙目になる。

「だから気をつけろって言っただろう」

「う、うとうとううるさいのだよ！！」

次の瞬間だった。好物の匂いを敏感に感じ取った二名が

いきなりテントから飛び出してきたので、ルナはあやうく
コーヒーをこぼしそうになって慌ててカップを抱きしめた。

「「カニタマアアアアアアアツ（甘口カレーエエエエエッ）」
ソファイバーンズとアスベルラントである。」

ロックスとシェリアにそれぞれカニタマと甘口カレーを
盛ってもらい、彼らはものすごい笑顔で食べ始めた。

その声に、次々と目をこすりながらイセリア村の村人たちと
残りの『ディセNDER』が目を覚ましていった。

「……二人の好物への執念はすごいね」

「まったくなのだよ」

ミトスユグドラシルと話ながらルナはジェイから
マーボーカレーの皿を受け取っていた。

ミトスはいろいろある料理からパスタをセレクトしたようだ。

ちなみに、カノンノはパイナッフルご飯、グラスバレーは

シナモンロール、パスカはキッシュを受け取ってぱくついていた。

いつの間に、とミトスが突っ込んだがスルーされた。

ルミナキヤスタニエとコレットブルーネルはアップルパイ、

ロイドアーヴィングはみそおでん、ルークセシル

とティアグランツはエビグラタン、ミルハウストはピーチパイ、

ウィルトリヒターはマーボーカレー、ユウキはガトーショコラ、

シェルは好み焼き、シェリアは焼き鳥丼、ジュデイスとスパード

はサンドイッチ、

ジーニアスセイジはカノンノと同じものを食べていた。

またはスプーンかフォーク

唯一箸を取らなかったのはリュウだけだった。

ルナは気に食わなさそうにそれを見ている。

と、何か思いついたかのように手を叩いた。

「お前、リュウと言ったな」

「……うん……」

『ディセNDER』と村人たちとヴェイグが二人を見ていた。

ルナはそれには構わず彼の手を取る。

「お前、『ディセンダー』に入れ。この旅が終わったら、死ぬなんて考えられないほど忙しい目に遭わせてやる」

リュウはびっくりしたようにルナを見つめていた。

ルナは紅い目をそろしもせず、彼を見つめ返している。

つなぎとめたかった。それが会ったばかりの人間でも、

せつかく繋がった絆を失いたくなかった。

それはルナがなにより怖いことだった。

何度も何度も絆を、命を失ってきた。

大事な人達の命を。

だからルナはそのためなら何でもしたかった。

「……いいの……？」

「無論だ。『ディセンダー』にはまだ空きがあるからな」

「……でも……僕、軍から追われてて……」

「それがどうしたのだね？ 私だって追われてるし……」

ああもうイライラするっ！！ 君は私たちと来たいのかね！？

来たくないのかね！！ どっちだ！！」

ルナは話の途中でトロワが死のうとしたことを思い出したのか、

感情を爆発させて叫んだ。ちょっと気持ちを落ち着かせようと

深呼吸してから彼を再び見る。

「君が私たちと来たくないならそれでも構わない。

だけど、私達と少しでも行きたいという気持ちがあるのならば、

『ディセンダー』も他の彼らも君を必要としている」

必要としている。その言葉は、今の彼が一番欲しい

言葉かもしれない。居場所をなくし、仲間も

いなかった彼には。

「……行きたい……」。

僕、必要、してるなら、一緒、行きたい……！！」

「よし！！ お前も今日から私たちの仲間だ！！」

こうして新たな仲間を加えたルナ達は、食事と

後片付けを終えた後再び旅を続けるのだった――。

それは、運命か神様の悪戯かもしれないなかった。

いきなり強い風が吹き、ルナのカバンから淡い緑色のリボンを盗んでいったのだった。

懐かしい品にユウキが目を見張る。

「あのリボンは……」

小さい頃、ルナが気にいって毎日つけていたリボンだった。

今は亡き、彼女の育ての親が彼女に送ったものだ。

「リボン！！ 大事なもののに！！」

ルナが泡を食って駆けだし行った。

ヴェイグが慌てて後を追いつ、他のメンバーも彼女達に続いていく。

ルナは木々の枝をかきわけるようにして進んでいた。

かなり慌てているのが、その青ざめた顔色からも良く分かる。

ルミナがこっそりと幼馴染であるヴェイグに聞いた。

「あのリボンって何なの？ ルナお姉ちゃんがかなり

慌ててるみたいだけど」

「あれは、ルナの両親の形見だ。――血のつながりはない

育ての親だけだな」

「そうなんだ……」

ルミナとユウキの会話はルナ以外には聞こえていたようで、

皆どこか憂いを含んだ目で彼女の後姿を見つめていた。

ルナは気が付いていないようだ。

と、スピードがいきなり落ちた。

疲れたわけではない。緑色のリボンを拾い上げた

女性の姿を発見したからだだった。

「……ヒルダ？ あなたが拾ってくれたのか！！」

くすりと優しく笑うと、ヒルダはルナにリボンを

手渡してくれた。

ルナはリボンに頬をすりよせると、大事そうに

カバンの奥にしまいこむ。

ルナから少し遅れて全員がたどり着いたのはその時だった。
青い目を見開いて、ミトスはヒルダを見つめている。

ルナはいぶかしげに彼を見たが、アイクはルナの方は
一瞥もしなかった。彼女だけを見つめている。

「あのタロットとオカリナ！ 間違いない、あの人は！！」

「まさか、マーテルⅡユグドラシルなのか！？」

ミトスの姉である女性の名前を上げると、ルナは彼女に視線を戻した。

ジュデイス、スパーダ、ウィル、リヒター、ロックス、ルミナ、グ
ラスバレー、

パスカ、ミルハウスト、ジェイもまた目を瞬かせて彼女を見ている。

しかし、事情を知らないヴェイグ、ジーニアス、カノンノ、ロイ
ド、コレット、

ルーク、ティア、アスベル、ソフィ、シェリアは首をかしげるばかりだった。

「私は『ヒルダ』よ。『マーテルⅡユグドラシル』なんて人物は存在しないわ」

ヒルダはルナの言葉を否定した。ミトスが強い瞳で彼女を睨む。

「名前も姿も変えて、それで自分の罪を捨てたつもり！？」

「人は罪から逃げられないわ。あなたはまだ甘いわね」

次の言葉に、ミトスは憎々しげな顔になると彼女にいきなり飛びかかった。

彼女の蹴りが鳩尾に叩きこまれ、うめき声上がる。

「……うっ、ぐっ……！！」

「ミトス！！」

パスカが彼に駆け寄った。よろめきながらも、

アイクは彼女を問いただそうとする。

「何でティトレイを殺したんだ！ あんなに仲がよかったのに……
なんで……！」

ヒルダは答えなかった。

片手に握られていたのは、『エターナルカード』だ。

「待て……!!」

「ミトス、やめてっ!!」

今度はグラスバレーが止めようとする。しかし、彼が再びとびかかるより先に、彼女の姿はそこから消えていた――。

ルナは彼女がいなくなった途端、

どこかうつむき加減に立っていた。

ミトスがそんな彼女を心配して声をかける。

ちなみに、パスカとグラスバレーに癒してもらったので

鳩尾の痛みは消えたようだ。

「ルナ? どうかした?」

「なんでもないのだよ」

にっこりと笑うとルナは仲間から少し離れた。

カバンからリボンを出してぎゅっと握る。

彼女の様子がおかしいことに気がついていたのは、

ジェイとヴェイグだけだった。

ルナは巧妙な造り笑顔で仲間達をだましているが、幼馴染の彼と、いつも近い位置にいるジェイだけはだますることができなかったようだ。

ヴェイグがルナを問いただそうとするのを、

ジェイが黙って止めていた。

『ディセンダー』は仲間全てを明かしている訳ではない。

知られたくないことは聞かないのが通例だった。

本人が言うつもりになる時まで。

ルナが大丈夫だというので、全員は支度を整えると再び歩き出した。異変が起こったのはすぐ後だ。

「ルナさん!!」

ジェイがルナに駆け寄り、その手を引いて自分の方に引き寄せる。今まで彼女いた場所に、大振りの剣が突き刺さった。

ルナが子供のような悲鳴を上げてジェイにしがみつく。
怯えたような、血走った瞳が彼女を睨みつけていた。

「死ねえええええっ、ルナ!! チェイサああああっ!!」
「させないわ!!」

ジュデイスが槍で投げられたナイフを弾き飛ばした。
ルナは青ざめた顔で動きを止めていた。

自分の腕の中で震える少女を、ジェイは幾分戸惑ったように見つめていた。

「ルナ、一体何が……」

いつもは勝気な彼女とは思えない様子に、
ヴェイグも驚いているようだった。

他のメンバーは気が付いていない。

男は明らかに正常の状態ではなかった。

体は小刻みに震えており、目は時折

どこをみているのか分からないほどさ迷う。

しかし、ルナだけに狙いをつけていた。

他のメンバーには目もくれていない。

「……殺す、ルナ!! チェイサー、殺す……!!」

ここで、ルナがハッとなったように我に返った。

ジェイにずっと自分が抱きついたままだと気づき、
真っ赤になって彼から距離を取る。

「皆、殺すな!! 事情を聞く!!」

『了解!!』

ヴェイグと、ルナのそばにいるジェイ以外が返事をした。
スパーダとリヒターが男の腕をひねりあげようとする。

だが――。

「いやだ……死ぬ、殺さない、死ぬ……!!」

「きゃあああああっ!!」

男は一番手近にいたシェリアの腕を掴み、
ナイフの切っ先をその胸に押し当てた。

ソフィ達の顔から一斉に血の気が引く。

「シェリア！！ お姉ちゃん！！」

ソフィが駆け寄ろうとしてアスベルに抱きとめられた。離してと暴れるが、向かったらシェリアが殺されるかもしれないので彼は離すことができない。

「ルナ！！ チェイサー、来い、さもないと、この娘、殺す」
「シェリアに手を出すな！！」

ルナが一喝した。びっくりなった男の腕の力が一瞬緩む。けれど、シェリアが抜け出す前にまた力が籠った。

「……ルナ！！」

ルナの目に炎が揺れていた。冷たくも熱く燃える炎は、彼女の無言の怒りを示している。

ルナは手に握ったリボンに力を込めると、黙って歩き出して男の前に出た。シェリアの腕を強く引いて彼女と位置を入れ替える。

「関係のないものに手を出すな。殺すなら、私だけを殺せばいいだろう」

「ルナ、やめろ！！」

リヒターがルナに向って怒鳴る。近づこうとすると男がルナにナイフを当てたため、動けなくなった。

「お前の目的は何だ。誰に頼まれた」

「……怖い、怖い、奴……お前殺さない、俺死ぬ……！！」
「……っ！！」

ナイフが振るわれた。ルナは間一髪でそれをよける。仲間達はそれを悔しげに見つめていた。
何もできないことを。

「死ぬ、とはどういうことだ？」

「死ぬ！！ 死ぬ！！ 死ぬ！！」

「……チッ。これ以上は無理か」

ルナが決意した顔になると、いつの間にか彼女の

頭上にいたモルモがナイフをルナの手に落とした。

ルナは一瞬痛みをこらえる様な顔になった。

しかし、ナイフを振りあげた時にそれはやってきた。

風を斬る音と共に、どこから小石が飛んできた。

それはルナのナイフと男のナイフにぶつかって弾き飛ばす。

「なっ……!!? 誰だ!!」

「ルナ!!」

ルナがいるのとは反対側の道から白い髪の少年が姿を現した。

彼の片手にはまだ小石が握られていた。

彼がナイフを落としたのだろう。

「お、お前はセネル!? セネルⅡクリーリッジか!!」

顔にマリントルーパーの証を入れた少年は頷くと

ホッとしたように息をついた。

彼もまた『デイセNDER』のメンバーである。

本部以外で活躍する旅メンバーの一人だ。

「ルナが、軍部の人間に追われているって聞いて……」

「心配して来てくれたのか!!」

男はナイフを落とされた後、ぶつぶつと何事か言っていた。

カチカチという音が聞こえる気がする。

「嫌だ、死ぬ、死ぬ、殺す、道連れ……!!」

「ルナさん!! セネルさん!!」

ジェイが二人に走り寄り、前に飛び出した。

男の恐怖の訳が分かったようだ。

ルナが理解したのはそのすぐ後だった。

「まさか、爆……!!」

「下がってください!!」

ジェイの声に反応してルナ達は身を引いた。

すさまじい爆音が轟く。ルナが助けられなかった、と

眩く痛みのこもった声は爆音にかき消された。

「「いやあああああああっ!!」」

シェリアとカノンノとコレットが気を失った。

男は口から血を出し、手を空に向けたまま絶命していた。

男の体に小型の爆弾が仕込まれていたのだ。

血の匂いがある場にあふれる。

セネル達が悲しそうに目を伏せた。

ルナは感情をなくしたかのような紅い瞳で男の死体を見つめていた。

ヒラヒラと紙切れが舞ってルナの手に収まる。

その紙を一瞥したルナはそれを握りつぶした。

ここにはいない相手を睨みつけるかのように、ルナは

虚空をずっと睨みつけていた。

その紙からは、ラズベリーののような匂いがしていた――。

おまけ短編 『彼氏自慢』

それはカノンノ達が偶然見つけた温泉に

入っていた時のことだった。シェリアが男は後ね、

と言ったので今ここに居るのは女性陣だけだ。

「のぞいたら殺す」

「安心しろルナ。お前の裸なんて見慣れてるからな」

「それは小さい頃の話だろうが！！ 誤解を招く

発言をするな！！」

ヴェイグがルナをからかったので、ルナの顔は

火を吹きそうなほど真っ赤になったのは余談だ。

そののきっかけはカノンノの言葉からだった。

「ルミナって、かっこいいよねえ」

「そうか？」

「ええ、かっこいいよ。ルナは男として

見てないから分からないんだよ」

ルミナをカッコいいと言う彼女の顔は、

頬が桜色に染まっていて完全に？恋する乙女？だった。

「あら、カノンノってルミナが好きなのね!!」

「私全然知らなかったよ」

「……恋するのはいいことよね」

シェリア、コレット、ティアも話に加わった。

ジュデイスとソフィは和から離れて温泉を楽しんでいる。

「ルミナもいいかもしれないけど、

ルーだってすごくカッコいいのよ」

そう言ったのはパスカである。

注目されながら頬を染めて話し始めた。

「ちよっとカッコ悪いときもあるけど、すごく優しいし
いざという時にはたよりになるんだから!!」

その後、ペラペラと彼氏自慢を始めた彼女に、

耳たこの『ディセンドー』メンバーが苦笑していたという――。

『しんっじられない?』

「しんっじられない!!」

火を囲んで話をしていた時、シェリアがぎょとしたような
声を上げた。話のネタに上がっているのは、お風呂事情の話である。

「お、お風呂に入っていない!!? 衛生的に悪いわよ!!」

何考えてるのよあなたたち!!」

旅をしていると、いつでもお風呂に入れるわけではない。

そして本部にもお風呂はないと言うと、彼女が喚きだしたのだった。

「話は最後まで聞きたまえ。確かに、お風呂には入らないけど、
温泉があったら必ず入るし、川や湖で体を洗うくらいはするぞ」

「旅館やホテルには泊まったりしないの? まったく入って
ないわけではないみたいだけど」

ルナの言葉に、シェリアはホッとしつつも詰問した。

ルナはきっぱりと言い放つ。

「基本泊まらない。主人が盗賊と共謀するなんてよくあるし、

盗賊が泊まらないとはかぎらないし」

「……」

頷いたのはスパードだった。

シェリアが二の句を告げられなくなったのは無理もない話である――

『たまには着替えようよ!!』

食料が少なくなったので、やむなく

ルナは女性陣を連れて街にやってきた。

メンバーは、ジュデイス、シェリア、カノンノ、

パスカ、グラスバレー、コレット、ティア、

ソフィ、ルナである。

料理の材料を買った後、服屋で悲劇(?)は起こった。

「ソフィ、かわいい!!!! これ買いましょうか!!!!」

見本として飾られていたリボンをソフィにあててみると非常ににあっていたためシェリアがリボンを購入していた。

コレット達も髪飾りやリボンを買っている。

と、彼女達が目に止めたのはルナだった。

ルナはぎよつとなるが、彼女達は目をきらきらさせて

かわいらしいワンピースやスカートなどを手に取っていた。

「ジュデイス!! 助け……!!!!」

「楽しそうだからいいじゃないの」

「ジュデイスウウウウウッ!!! そ、ソフィ!!!

君なら助けてくれるよな!?!」

「大丈夫。ルナならよく似合うよ!!!!」

「そういうことじゃなあああああい!!!!」

さすがは天然である。ソフィはルナの助けを

純粋な目と気持ちでもって断った。

無理やり服を着替えさせられ、ピンクのワンピースを

着せられたルナは、男性陣に驚かれ、ジェイとセネルとリュウには
かわいと言われ、ヴェイグにはからかわれといった目に
遭い半泣きになったという――。

裏切りの乙女の姉妹達（後書き）

久しぶりに投稿できました。

次回はルナ達の過去話になります。

裏切りの乙女の過去と仲間達との出会い

過去短編集 ルナ編

『紅い海での出会い』

ルナは気づいた時、紅い海――

真っ赤な花が咲き乱れる花畑にいた。

小さな体に鈍い痛みが走っている。

頬もまたしびれるように痛かった。

頬を叩かれ、無理やりどこからか落とされたのだろう。

当時彼女はまだ三歳だった。この時以前の記憶は彼女にはないから、三歳というのも推定だが。

「ここ……どこ……？」

ルナは咲き乱れる花より若干淡い色の瞳を泳がせた。
肩までの髪がそれに合わせて揺れる。

「ようやく起きたか」

ぞんざいな男の声がして、そこを見つめた。

男はルナに銃口を向けていた。

ルナはその意味も武器の危険性も知らず、ただ
目を瞬かせるだけだ。

「おじさん、だあれ……？」

「うるせえよ」

男の目はひどく冷たかった。

怒っているのだろうか、睨まれたルナがびくりとなる。

「もう一度痛い目に遭いたくなきゃ大人しくしてるんだな。

ほら、来いよ!!」

痛いほどの力で腕を掴まれた。ルナは涙目になって暴れる。

「いやっ!! はなして!!」

「もう一度殴られたいかこのガキッ!!」

「や、やめろ!!」

聞こえたのはルナより少し年上と思われる少年の声だった。

潤む視界のルナの目に映った姿は、涼しげな空色の髪の少年である。

「そのこをはなせ!!」

ヴェイグ||リュングベルは男に体当たりをくらわせると、

少女の腕を掴んで男から引き離れた。

ルナは必死でその腕にすがりつく。

だが、男はまだ幼い少年にしてやられたという怒りで激昂していた。

「お前も痛い目に遭いたいのか!!」

ルナの目が恐怖でまた潤みだす。

ヴェイグは思わず少女をその胸に抱き寄せた。

その時――。

「「ファイアーボール!!」」

ハモって聞こえたのは、少女と女性の声だった。

ヴェイグがハツとなってそこを見ると、箒に二人乗

したアーチェとルーチェのクライン母子がいた。

「アーチェ!! ルーチェさん!!」

ヴェイグの顔がホッとしたように緩む。

ヴェイグを殴ろうとしていた男は、泡を食って逃げ出していた。

アーチェがべえと舌を出し、ルーチェが悪戯っぽく笑う。

ルナはよくやくにつこりするとヴェイグを見つめた。

「おにいちゃん、ルナをまもってくれてありがとう」

これが、ルナとヴェイグ、そしてクライン母子との出会いだった

――。

『新しい生活』

ルナはヴェイグ達に連れられ、そのままアイリリーの村に

住むことになった。両親のことも家のことも分からないと言うので、

ルーチェが彼女を引き取ることにしたのだ。

ルナは不安そうにしていたが、アーチェや、ルナとは一個年下の妹であるアリエッタとはすぐに仲良くなった。

最初はびくびくしていたルナだが、徐々に明るくおてんばな娘へと成長していった。アーチェや、バートンチェイサーの娘パティと

共に悪戯を繰り返し、それを止めようとしたヴェイグを巻き添えにするのがすっかり習慣になっていた。

成長するにつれてルナが打ち負かされることになるのだけれど、この時の十歳になる前のヴェイグは本当に気が弱くて、ルナに泣かされることや、勝手に悪戯仲間に引き込まれることも多々あったのだ。

それをなぐさめるのはいつも妹のクレアとリュングベルだった。

後に、バートンはルーチェと結婚し、パティ、アーチェ、ルナ、アリエッタは

四人姉妹として特に村の中でも仲が良くなったのだった――。

『壊された日常』

それが崩れたのは、二年後のことだった。

ルナ五歳、アーチェ六歳、パティ四歳、アリエッタ三歳、そしてヴェイグはアーチェより一つ上の七歳だった。

ヴェイグの妹、クレアはルナ達と同じ年だ。

子供たちが知る由もない理由で、ルナは軍に個人の私兵として入りこむことになったのだった。

バートンとルーチェは軍属だった。

ルーチェはよく利く薬を作れる衛生兵として、バートンは優秀な兵士として活躍していた。

しかし、彼にとって不幸だったのは、？軍部の機密事項？とも言える情報が上層部からもたらされたことだった。

上層部は、ルーチェとバートに人体実験の協力を求めた。

上層部は研究科の者達の非道な行いを見過ごしているばかりか、資金的援助や人員的援助も行っていたのだ。

当然バートもルーチェもその申し出を断り、なおかつ軍を除隊した。

ルナが軍部に連れて行かれたのはその後だ。

ルナは、いわゆる人質だった。

そのことを証言したら、大事な娘がどうなるかわかっているのか、という言外な脅迫だ。無理やり取り戻しても殺すと言われていたから、バート達はどうすることもできないまま悲しい月日をすごすことになるのだった。

その日が来るまでは、ルナはまだ幼い普通の少女だった。

「うわあああああん！！」

「またヴェイグがなかった」。ほんとうにあたしよりというえなになきむしなんだから」

「ちよっとルナ！！　ヴェイグなかすのいいかげんやめたら？　かわいそうじゃないの！！」

ルナは遊びで投げ飛ばしたヴェイグが泣いたのを見て、いたずらっぽく

笑いながら彼をはやしたてていた。

アリエッタとパティとクレアがなぐさめるが、ヴェイグはさらに泣くばかりだ。

アーチェにいさめられたものの、ルナは悪びれなかった。

「だってヴェイグすぐなくからおもしろいんだもん」

ちよっといいかな、と声をかけてきたのは、彼女達よりかなり背の高い大柄な男だった。人を疑うことを知らないルナは、笑顔で彼についていく。アーチェ達が不安そうに見つめる中、何事か耳にささやかれたルナの顔から表情が消えた。

「ルナ、どうしたの？」

「あたしかなきゃ。ようじ、そう、ようじがあるの！！」

言うことを聞かなければ両親を殺す。

そうささやかれたルナは、慌てて止めようとする姉妹達や幼馴染を振り切るようにして男について村を出て行った。

ルナはそれから長い間軍で過ごすこととなった。

軍部には乱暴なものをいたし、口の悪いものも根性が腐っている最低な奴らもいた。無論、心根のいい人もかなりいたのだが。

ルナは今まで知らなかった軍部の汚い部分を知ることでしたいに大人びて行った。ルナには二カ月に一度一週間の休暇があり、そのたびにアイリリーの村に帰ったけれど、帰るたびにルナは変わったと姉妹達に良く言われた。

ルナは掃除から下働きから薬作りからなんでもやった。両親を殺させてなるものか、と軍部からの命令に逆らわなかった。

要人の暗殺や、軍部の人間の処分をしたこともある。

初めて人を殺したその日、ルナは三日三晩眠れなかったが、それもしだいになれていったのだった――。

『燃え広がる炎の龍』

ルナがサレに会ったのは、軍に来てもうすぐ一年になろうとしている時だった。

その頃のルナはすっかり軍部に希望は捨て、どこかすれてしまっていた。

彼との出会いは、後にルナに多大な影響を与えるのだが、その時のルナはもちろんそのことを知らなかった。

「君がルナちゃんかい？」

「あんただれ」

紫の髪をした優しげな顔の男に声をかけられたルナは、突き放すような冷たい声で返した。

それでも、男はにこにことしている。

「僕が君の新しい雇い主のサレだよ」

ルナは生意気なところをとがめられ、何度か雇い主もとい監視役が幾度か変わっていた。

ルナはまだ五歳なので正式な軍属にはなれないため、個人の？私兵？として働かされているのだ。

その時はルナは特に特別な感情を持つてはいなかったが、サレは彼女にかなり優しくしたり時に贈り物をしたりした。

乱暴な事をされたり、乱暴な言葉ばかりを使う雇い主しか見たこともなかったルナは、すぐに彼に心を許し、幼いながらも恋心を抱くようになったのだった。

サレは決して彼女を殴らなかったし、乱暴な言葉も吐かなかった。それが策略だと、ルナがもし気づいていたらその後の悲劇はふせげたかもしれない。

しかし、まだ五歳の女の子にそんなことは無理だった。そして、五年後、ルナが十歳になる頃に悲劇は起こった。

その日、何も知らないルナは上機嫌でサレと共に馬に乗っていた。両親の罪は君のおかげで許された、だから君も村に帰っていいんだよと言われたのだ。

（サレ様に、今日こそ想いを告げるんだ……）

もう少し大きくなった自分が、彼の隣で笑える未来を、この時のルナは信じて疑うことがなかったのだった。

「父さん！！ 母さん！！ クレア！！」

ルナは馬から降ろされるなり、バートとルーチェに抱きついてこの次第を話して笑顔になっていた。

アリエッタ達とヴェイグはその時いなかった。

いつもの花畑に出かけていたのだ。

いたのは母親の手伝いで残っていたクレアだけだった。

「今までルナちゃんはしっかり頑張ってくれましたよ」

にっこりと笑いながらサレは言った。

両親は警戒しながら近づく彼を見ている。

その優しそうだった顔が、冷酷な顔に変わった。

驚いて動けない彼女の前で、サレはルナの育ての親をナイフで惨殺した。

ルナは声にならない悲鳴を上げてへたりこんだ。

「ど、どうしてですか！！ ……サレさま、なにかの、まちがいです、よね……？」

「間違いなんかじゃないさ」

「だって、いったじゃない、ですか……」

わたしがぐんにはいれば、りょうしんはみのがすって……」

「そんな嘘をすっかり信じてたんだね。ようやく見れたよ、信じていた人に裏切られ、踏みにじられた君の顔が、ね。」

口封じって知っているかい？ この村はそれで消されるんだよ」

「サレええええええええええええええええええっ！！」

ルナの中で何かがはじけた。ずっと騙されていたことに、言われてようやく気がついたのだ。

しかし、サレに向けたはずのナイフを持つ手は震えていた。好きだった。幼いながらも、本気で愛していた。

その彼を、ルナは殺せなかった。

紅い目から涙の雫が垂れ落ちて行く。

「僕を殺さないのかい？ ルナちゃん？」

「……っ！！」

風の刃がルナを切り裂いた。サレが魔術を発動させたのだ。

ルナは胸を押さえてその場に倒れ込んだ。

村人たちが悲鳴を上げてルナに駆け寄ろうとする。

「やめ……みんな、にげ……」

悲鳴は絶叫に変わった。サレの風の刃が次々と村人を斬り裂いて殺していく。

クレアとその両親も例外ではなかった。

サレの指示で、待機していた軍属の兵士が村に火をつけたため、猛り狂う炎がまるで龍のようで気持ちが悪かった。

(しぬ、の……？ まだ、かたき、
とって、ない、のに……)

ルナは舞い踊る龍のような炎を
見つめながら意識が遠のいていった――。

『憎しみの瞳』

「ねえ、君！！ 君ってば！！」

「モルモ！！ そんなにゆすっちゃ駄目だよ！！」

「生きていらっしゃるのかしら？」

「僕達の声が聞こえますか！？」

ルナは耳をつんざかんばかりの声でうつすらと目を開けた。
苦しげな息を吐きながらルナは必死に声を出した。

「だ……れ……？」

「オイラはモルモ！！ オイラ達、守護精霊なんだ！！」

ねえ、ものは相談なんだけど、そのマナ少し
オイラ達に食べさせてくれないかな？」

「お願いします。僕達は清浄なマナがないと生きていけないんです。
代わりと言ってはなんですが、僕達の力を分けますので」

ルナの死んだようだった目に光が宿った。

胸をおさえながら立ち上がり、モルモと名乗った白い生物を掴みあげる。

「マナなら……いくらでも、あげる……だから、ちからをちょうだい……」

おとうさんたちのかたきは、わたしが取るわ！！」

ルナは憎しみに満ちた瞳で宣言し、少量のマナを生きている限り
彼らに食べさせる契約を交わし、力を手に入れた。

体力はすぐに回復し、目を開けたルナの目に

飛び込んできたのは、すっかり焼けて村の様相をとどめていない村
だった。

「きゃああああああつ、な、何よこれ!!」

「パパ、ママ!!」

「父さん、母さん、そんな……」

そこに、アーチェ達が帰ってきた。

悲鳴を上げる彼女とは裏腹に、ヴェイグはショックのあまり口を利けないようだった。

ルナは泣きそうな想いでアーチェ達に全ての事情を告げた。その時のユウキの冷たい目を、ルナはかなり後になっても忘れられることができなかった。

優しく大人しかった少年は、すっかり壊れたような冷たい瞳と声で自分の憎しみを吐き出した。

「みんなころしてやる……ぼくがぜんぶこわしてやる……ぐんじんもみんなもぜんぶ、こわしてやる……」

家族を無残に殺され、しかも死体さえも村と

一緒に焼かれて残らなかったと聞かされた少年の瞳は、先ほどのルナ同様憎しみに染まっていた――。

過去短編集 ヴェイグ編

『冷たい心』

ヴェイグⅡリユングベルが軍に入ったのは、わずか十二歳の頃だった。

私兵ではなく、正式な軍属だ。

以前の虫も殺せないような優しく大人しい少年の面影は、もう彼には存在しなかった。

当時十歳だったルナは、正式な軍属と

なった後再会したヴェイグの変貌に驚いたのだが、実際のところヴェイグもすっかり変わったルナに驚かされたのだった。ルナは口調や性格が

以前とは全く違っていたのだ。

ヴェイグは家族を殺された痛みで性格がすっかり歪んでしまっていた。

任務でルナと一緒にすることもあったが、

一般人も軍属も無差別に殺すヴェイグと、

一般人には手をかけないルナとの

衝突は絶えなかった。

「ヴェイグ！！」

任務が終わってくつろいでいた時、

頭に血を上らせたルナがノックもせずに

軍のヴェイグの自室に飛び込んできた。

面倒そうにヴェイグはルナを見る。

ルナは小さい頃から、彼の性格もあったのだが、
年下の癖に年上のようにふるまうのだった。

「なんだルナ、また説教か？」

「一般人を殺すのは任務外のことだろう！？

なんで、お前は毎回毎回……！！」

ヴェイグはルナが甘いと思っていた。

何故見も知らぬ一般人に同情するのだろう、と。

「一般人を殺したくらいで喚くなルナ

……別に上層部からも許可は得てるんだからな？」

ルナはぐっ、と詰まった。上層部が求めているのは、

優秀な軍人ではない。精巧な殺戮人形だ。

エリートと呼ばれる奴らの中に、そういう人物が

たくさんいることをルナは知っていた。

「何故、一般人を殺すんだ？」

ルナは気分を落ちつけようと、ポケットに隠し持っていた

緑色のリボンを強く握りながら言った。

しかし、次のヴェイグの言葉を聞いて頭に再び血が上った。

「殺したいから殺した。それだけだ」

「ヴェイグ!! お前え!!」

ルナはヴェイグに飛びかかった。

くらくらとする憤怒の心に身を任せ、
ヴェイグを殴ろうとした。

しかし、そのまま腕を掴まれると
投げ飛ばされてしまった。

容赦なく床に叩きつけられて呻く。

「小さい頃とは違うんだ。」

腕ずくで言うこと聞かそうとしても無駄だ」

「くっ……!!」

「面白かったぞ? 必死に助けを求めて子供を庇った
夫婦をなぶり殺しにしたのは……」

ヴェイグはルナの神経を逆なでするように大声で笑い出した。
ルナはしびれるような痛みに耐えながらも声を絞り出す。

「お前が、他人を殺すのは、復讐のため、か……?」

「軍に復讐するのが俺の目的じゃない。」

すべての人間を俺みたいに絶望させてやりたいんだよ俺は……」

ルナは悲しげな顔でヴェイグを見つめていたが、やがて
黙って部屋を出て行った――。

『行いは必ず自分に返る』

その後もルナはヴェイグの説得を続けたが、ヴェイグは全く
彼女の耳に言葉を貸さずに五年が経とうとしていた。

力づくでも止めようとするルナと、

そうはさせじとするヴェイグの戦いは何度か行われたが、
ヴェイグは負けることはなく、いつもルナを打ち負かしていた。

ヴェイグは十七歳、ルナは十五歳になっていた。

その時ルナは『殺戮天使』、ヴェイグは『冷血騎士』という
あだ名を勝手につけられるほど二人は活躍していた。

ルナは天使のような可憐な容姿で人を、主に軍属や要人などを殺しまくっていたし、ヴェイグはまだ容赦なく軍人だけでなく一般人も殺していたからこそそのあだ名だった。

その少女と出会ったのは、ヴェイグが任務で初めての

失敗をした夜でのことだった。任務中に、ヴェイグが以前

殺した一般人の娘が死を賭して自爆魔法を発動させたのである。

「死ね、ヴェイグ！！リユングベル！！」

「っ！！」

「ヴェイグ！！」

運悪く崖の近くという足場が悪い場所にいたために、

足を滑らせたヴェイグは下へ下へと落ちて行く。

ルナの泣きそうな顔が、その時のヴェイグが

最後に見た光景だった――。

『清らかなる少女との出会い』

大怪我をしてしかも崖下に転落したヴェイグが目覚めたのは、丸太づくりの小屋の中だった。

パチパチと暖炉の中の薪がはじける音が聞こえる。

「ここは――？」

「おきた、ですか？」

焦点を結んだヴェイグの瞳が捕えたのは、黒髪に薄い桃色の瞳をしたまだ十に届くか届かないくらいの少女だった。

「あなた、けがしてたから、モモがいえにはこんだ、です」

たどたどしく説明しながらモモと名乗った少女はヴェイグを見つめた。

ヴェイグはそこで初めて、自分が木造りのベッドに寝かされていたことに気がつく。体にはぎこちなく包帯が巻かれていて手当がされて、

厚い布団がかけてあった。

「お前は、誰だ!!　ぐっ……!!」

「モモ、です。うごかないでください」

起き上ろうとしたヴェイグは痛みで呻いた。

慌てて寝かせようとするモモの手を振り払い、

自分が持っていたハズの武器を探ろうとする。

……武器は取り上げられておらず、

まだ服の中に収納されていた。

ヴェイグはにこにこ笑う少女が気に食わず、

持っていたナイフでモモを殺そうとした。

しかし、きらめく刃に怯えもせず、

モモはそれはそれは眩しい笑顔に向けたのだった。

「げんきになって、よかった、です」

ユウキは拍子抜けしてつい武器を降ろしてしまった。

たとえ怪我をしていても、殺そうと思えばすぐに

殺せたはずの少女を、彼は殺すことができなかった。

恩を感じたわけではない。この少女が気に行った訳でも、

全てを壊したいと思う気持ちがなくなった訳でもなかった。

その時のヴェイグは、自分でも、何故この少女を

殺すことができなかったか気付かなかったのだった。

「なんでだ……なんで、あんな子供を殺せなかったんだ俺は……」

話を聞くと、モモは両親もすでになく、ここで

一人で暮らしているとのことだった。

狩りや釣りなどをしながら自給自足で暮らしているらしい。

モモは自分が殺されようとしていたことなど一切気がつかず、

自分の分だけでなくヴェイグの分まで食事を用意した。

ヴェイグは最初は警戒して口をつけなかったものの、

しばらくモモの家で暮らす内に毒気を抜かれて

食事を一緒にとるようになっていた。

ヴェイグは怪我が治るまでモモの家に滞在し、いろいろな話を聞くうちに人を殺すことのむなしさのようなものを

感じるようになっていた。

「ヴェイグにいさま、また、あいにくで、です」

怪我がすっかり癒えて彼女の家から出る時、
今にも泣きそうなモモに見送られたヴェイグは
ある決意を胸に秘めていた――。

『憎しみと決別』

ヴェイグはモモに道を聞いていたので、
すぐに軍部へと戻ることができた。

彼が目指して歩いているのは、
ルナの自室である。

『モモは、もうちょっとおおきくなったら、
ぐんにはいる、です。ぐんにはいつて、
ぐんをかえる、です。』

とうさんたち、ぐんにころされた、から』

ヴェイグは自分のしたことが間違っていたと
気づいていた。いや、本当はずっと間違っていると
気づいていて気付かないふりをしていたのだが。

「ルナ！！」

自室のドアを叩くと、ルナが飛び出すようにして

部屋から出て来てヴェイグにぶつかってきた。

否、抱きつこうとしたが、慌てていたので

そうなってしまったのだろう。

「ヴェイグ！！ ヴェイグ！！ ヴェイグ！！」

本当に君なのかね！？ 無事で、よかった……」

ヴェイグは一時的にルナに押し倒される態勢になっていた。
冷静な声で早く降りろと言ったら、ルナは真っ赤になって
彼から離れたけれど。彼女はまだ小さい頃の習慣が
抜けきっていないようだ。

「それで、私に何か用なのかね？」

ようやく落ち着いたルナは、自室にヴェイグを招き入れてピーチパイとミルクティーを出した。

ヴェイグは真剣な顔でルナに宣言する。

「俺は決めたんだルナ……もう誰かを殺すような真似はしない。俺はお前を止めるために軍を辞める」

ルナは黙ってお茶を飲み干した。

しかし、目だけはぎらぎらと光を放ちながら彼を睨む。

「……随分勝手なのだね。一般人を殺すなという私の忠告をたびたびはねつけておきながら、今度は軍人も誰も私に殺すなと？」
ルナは自身のカップを床に叩きつけて割った。

怒りのままに行動し、ヴェイグの胸倉をつかみあげる。

「世の中には、生きる価値のない者たちだっている……！」

私達『ディセンダー』の中にも、そういう奴らの被害者がたくさんいるんだ……！　なのにお前は人は殺すなと言うのか……！」

軍の手前勝手な行動で、家族や平和な日常を奪われた者、

実験体にされさんざん苦しめられた者。

それが『ディセンダー』にはいた。

国を、軍を変えたい。その意思表示が集まってできた反乱軍だ。

「私はもう、軍の被害者を出したくはない。こうして話している間にも、殺されたり、上層部や研究科の奴らに苦しめられている者達がたくさんいるんだ……！」

ヴェイグはルナの腕を掴もうとしたが、ルナは彼が手を取ろうとする

ことを見越してそれを回避した。

「モルモ……！ エターナルカード……！」

ルナは守護精霊を呼び出すと、自費で購入した貴重なカードを使ってヴェイグをこの場所から飛ばした。

怒声が聞こえたが聞こえないふりをした。

この後、またヴェイグと出会い戦うことになることを

ルナはまだ知らない――。

過去短編集 ジェイ編

『失った命』

ジェイはイセリア村で生を受けた。

平凡だが、平和だったはずの日常。

それは簡単に壊れてしまった。

ジェイは軍の人間に誘拐されたのだ。

悲鳴を上げ、どうしていいかわからない村人たちをよそに、追って行ったのはドワーフであるダイクだった。

ジェイにはすでに親はなく、ダイクが育ての親みたいな感じだったのだった。

「待ちやがれ！！ ジェイを返せ！！」

ジェイは誘拐された時の恐怖からか、気を失っていたのでダイクの声に反応しなかった。

ダイクが自らの獲物であるハンマーを振りあげた、その時だった。

「……サンダーブレード」

「ぐあああああああっ！！」

黒いマントをはおった小柄な人物が魔術を放った。

雷の刃にやられたダイクはその場に倒れ伏す。

少女とも子供とも分からない人物は、よろめいたダイクの心臓をナイフで貫いた。そのままつまらなそうに鼻を鳴らす。

「ジェ……イ……」

「とうさん！！ ダイクとうさん！！」

ダイクの悲鳴が聞こえたのか、ジェイがこの時目を覚ました。血で染まったダイクの姿を見て悲鳴のような声を上げる。

「はなしてください！！ とうさんが……！！」

「うるさい」

「うっ!!　とう、さん……」

ジェイは父の死を悲しむ間もなく、軍の人間に腹に拳を叩きつけられて気を失った――。

『生きるために』

それからのジェイの生活は生き地獄と言ってもよかった。軍の施設の連れて行かれた後、麻酔をかけられたジェイはすぐに強化実験のための手術を受けさせられた。

その時は麻酔のおかげで痛みは感じなかったものの、麻酔が切れた後も放っておかれたためにかなりの苦しみをジェイは味わわされた。その後も、脳に無理やり情報を入れられたり、さらに体を強化されたり、ジェイはさんざんな目に遭わされた。

軍部が求めていた『殺戮人形』にされそうになっていたのだ。度重なる実験や手術で記憶さえも奪われ、そのまま目覚めなければ、ジェイは『意思』や『感情』さえも欠落した完全な『殺戮人形』にされていたかもしれなかった。

しかし、ジェイは目覚めた。目覚めて、自分を戒めていたベルトを歯で噛み切って脱出した。

「く、来るな!!　来ないでくれ!!」

研究科の研究者は悲鳴を上げて後退した。

しかし、ジェイはその闇のような瞳で冷たく研究者達を見つめていた。

研究者達はその瞳のあまりの冷たさに、自分たちのやったことを後悔したがもう遅すぎた。

「覚悟はできていますか？　研究者のみなさん」

ジェイはそのまま自分に危害を及ぼした研究者達を殺し、そして軍の研究科を抜け出して逃げ出した――。

『出会ったのは鮮烈なる色』

ジェイはその後、軍の人間に追われて逃げる生活を続けていた。
「非検体No. 010001止まれ!!」

軍の人間としては、『強化人間』は自分達の手元に置くか、
でなければ情報漏えいを防ぐために殺すしかないのだ。

ジェイは何人かの軍関係者を、両手両足を斬り落とすと言う
残酷な殺し方で殺した。その殺し方は、無論軍部や、
研究科の者達に刷り込まれた情報だ。

殺された者達は、全てこの件に干渉している者達だった。

ジェイにとっては、憎みこそすれ同情することはないだろう。

ジェイは食料が見つからないため、殺した軍関係者の
死体や草や、はては泥水まですすって生活した。

さすがにかなりの数を殺して疲れ果てていた時、

ジェイはルナと出会ったのだった。

紅い系統の服装と紅い瞳、金の髪が鮮やかだった。

ルナはジェイと、追っている軍人を見て状況を判断したようだ。

「殺戮天使殿、いいところに!!」

喜ぶ軍人を冷たく見つけたルナは、持っていたナイフを
振るってそのまま軍人を殺した。

笑顔のまま、何が起こったか分からない内に軍人は死んだ。

「お前、名前は？」

「ジェイです……」

「行くところがないなら『ディセクター』に来るか？」

優しい笑顔を向けられたジェイは、そのまま
ルナについていくことを決意した――。

『ディセクター達との生活』

ジェイはそのままルナに本部へと案内された。

他のメンバーも笑顔でジェイを歓待した。

感情をめったに顔に出さないプレセアだけは例外だが。

その時のメンバーは、カノンノⅡグラスバレー、カノンノⅡパスカ、ルーⅡユグドラシル、ルミナⅡキャスタニエ、プレセアⅡコンバティール、ユージーンⅡガラルドだった。

リヒターⅡアーベントはすでに在籍していたが、旅に出ていたので本部にはいなかった。

当時のジェイは、軍部で入れられた『殺人』の記憶と、わずかな軍部での生活のことしか覚えていなかったのも、最初にルナに出された食事は犬のように食べていた。

プレセア以外のメンバーに箸の使い方などを

優しく教えられて徐々にいろんなことを覚えて行くジェイ。

ジェイはしばらくの間情緒が不安定で、

心配したルナが寝る時やそれ以外でもジェイと一緒にいた。

プレセアはルナに心酔していたので、ジェイに

焼き餅を焼いて彼とは距離を取っていたようだ。

それになりよりプレセアがジェイを毛嫌いだしたのは、

ジェイが人体実験のことを思い出して混乱し、

ルナにいきなり飛びかかったからだった。

ぶつかるようにジェイを突き飛ばした

プレセアの紫の瞳が怒りで燃え上がった。

「よくもルナ様を！！ 殺す！！ こいつ殺す！！」

「やめろプレセア！！」

「駄目だよ！！ 落ち着いて！！」

「だってこいつがルナ様を！！」

ルナ様おとおおおお！！」

ルナを誰よりも信頼して彼女のためなら死ねると

思っていたプレセアは、ユージーンやグラスバレー達に

止められながらもジェイを殺そうと斧を振りまわしていた。

最終的にルナが怒鳴って止めさせたが。

「嫌われるのは仕方ないです。それだけの事をしたんですから」
後にジェイは、プレセアの態度にすまないと謝るルナにこう返している。

プレセアはこの件が原因で、かなり後になった今でも
ジェイを許していないのだった――。

裏切りの乙女の過去と仲間達との出会い（後書き）

ついにルナ達の過去が明かされます。

次回からは本編に戻って話は続きます。

他のメンバーの過去編も少しずつ

投稿していく予定です。

次回の次回は、第二回キャラ紹介をします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6536r/>

テイルズオブヴァンジャンス

2011年12月8日10時48分発行